二松學舍大学・柏市教育委員会　共催

企画展

芳野金陵と幕末日本の儒学

二松學舍大学・柏市教育委員会　共催

企画展　芳野金陵と幕末日本の儒学

展示会場：①二松學舍大学資料展示室（九段一号館B三階）
②二松學舍大学法人資料室（柏五号館図書館内）
③柏市郷土資料展示室（柏市沼南庁舎内）

展示期間：①平成二七年一〇月一〇日（土）～一二月二五日（金）
②平成二七年一〇月　三日（土）～一一月三〇日（月）
③平成二七年一〇月一〇日（土）～平成二八年二月二八日（日）

講演会：演　題　「芳野金陵と幕末日本の儒学」
講演者　町　泉寿郎（二松學舍大学　文学部教授）
日　時　平成二七年一〇月二四日（土）一三時三〇分～一五時
会　場　二松學舍大学柏一号館二階二〇五号室

芳野金陵と幕末日本の儒学　―目次―

企画展開催にあたって

Ⅰ　芳野家の歴史　……7
―南北朝以来の歩み
―松ヶ崎における芳野家（村役人と医業）

Ⅱ　金陵と近世儒学　……10
―近世後期儒学の諸派
―金陵・復堂・桜陰の著書
―金陵の蔵書

Ⅲ　金陵と幕末維新史　……23
―金陵と田中藩
―金陵と本多正訥
―金陵と幕末の時務策
―金陵門下の志士たち
久坂玄瑞・松田和孝・河本正安・中村太郎・芳野桜陰

Ⅳ　金陵と昌平坂学問所　……32
―学問所資料
―金陵の辞令類

Ⅴ　芳野家塾「逢原堂」……38
―家塾の教育と門人たち
―退隠後の金陵と文雅の交わり
―清国公使館員との筆談
―その後の芳野家―世経・菅子・幹一

附録、印譜　……47
年譜・系図

凡例

一、本書に収録した資料のうち、特に所蔵先を記さないものは、二松學舍大学に所蔵するものである。

二、本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体など通行の字体を基本とした。

三、人物の呼称は基本的に姓号を用いるが、汎用される姓名等を用いた場合もある。

四、年齢表記は、旧暦の生年を起点とした数え歳による。

五、図版解説は、町泉寿郎と清水信子が分担執筆し、清水は18～23ページ、それ以外は町が担当した。

六、巻末附録は、印譜を寺内進が、年譜・系図を清水信子が作成した。

七、本書は二松學舍大学資料展示室（九段）、および法人資料室（柏）における企画展「芳野金陵と幕末日本の儒学」の展示図録を兼ねるものである。

芳野金陵

芳野世経

芳野桜陰

企画展「芳野金陵と幕末日本の儒学」の開催にあたって

文久三博士として知られる幕末の大儒・芳野金陵（一八〇三～七八）は、現在の柏市松ヶ崎に生まれ、江戸に出て亀田綾瀬に儒学を学び、江戸市中で私塾を開業。次第にその文名が高まり、柏市近辺に飛地があった駿河田中藩（現静岡県藤枝市）に藩儒として仕官し、さらに昌平坂学問所付きの幕府儒官となり、明治維新後も学問所の後を承けた大学に出仕した。退官後は漢学塾を開き、その生涯を通じて多くの門人を育てた。しかし現在、その名は埋もれてしまっている。今回、「芳野金陵と幕末日本の儒学」と題して企画展を開催しようと考えた主な理由は、近世・近代学術史上および幕末維新史上、芳野金陵と同家資料の意義は決して忽せにできないと考えるからである。

近世・近代学術史の上で第一に注目すべきは、幕府時代から明治新政府への移行期に、一貫して「官学」の教官を務めた殆ど唯一の存在が芳野金陵であり、その経歴を反映する文書が残っていることである。幕府の学問所（及び附属の和学講談所）は新政府に接収され、昌平学校（一八六九）、大学校（一八七〇）、大学（一八七〇）と改組された後、洋学と皇漢学の対立が解消されないまま廃校となったが、この間の金陵の辞令類がよく残っている（図録36・37頁）。また別稿※に記したように、大学廃校後に帰属を失った旧学問所関係文書はすべて金陵が引き継ぎ、退隠後に自宅に保管していたと推定され、筑波大学に現蔵される「昌平坂学問所関係文書」が第二次世界大戦前後に芳野家から流出した後も、少なからぬ文書が現在まで芳野家に伝えられた（32～35頁）。この学問所関係文書とは別に、文久の制度改革によって学問所奉行となった田中藩主の本多正訥と金陵は単なる君臣関係を越えた長年の師弟関係にあったため、正訥の私信が多く残された（24・25頁）。また長女菅子がその奥に出仕して個人的なルートがあった前福井藩主の松平春嶽が、維新後に大学別当となったことから、その文書も残った（34・35頁）。学問所儒者としての金陵は、実現をみなかったものの学問所管轄下に小学十数を開設することや本邦諸儒経解の編纂を建議しており、最末期の学問所改革案として注目すべき視点を含む。大学の廃校は、開成所を継承した南校の法学・理学、医学所を継承した東校の医学が存続する一方で、従来、教学の中心であった漢学による「文」の学びが公的教育機関から消滅したことを意味し、和漢学と洋学がくっきりと明暗を分けた形で日本の近代化が始動する。

※拙稿「新出の昌平坂学問所日記―芳野家所蔵資料」『斯文』一二四号、二〇一四。

その渦中にあった金陵の資料は、学校制度史上、重要な意義をもつ。

更に遡って考えるべきは、異学者の系譜に属する金陵が学問所儒者になったことが意味する、幕末における「官学」の変質である。当初、金陵は亀田鵬斎に師事しようとしたが老齢のため断られその嗣子綾瀬に入門した。鵬斎は寛政異学の禁の際に「異学五鬼」の一人として指弾された人物である。異学禁令は思想弾圧というような苛烈なものではなかったが、朱子学を正学とする幕臣向けの普通教育を確立するために、それ以外のものを排除し、幕初以来の林家私塾を学問所に改組したことの教育史上の意義は大きい。他方、異学者鵬斎の学統は井上金峨に始まる折衷学に属し、その学風は個人的修養よりも政治的実践を重んじ、その博覧多識は経書や詩文に止まらず、北方問題等の外交的危機意識のなか海外情勢にも及んだが、それが政権側からは忌避されもした。金陵が仕官する田中藩の学問は、同じく「異学五鬼」の山本北山に学んだ石井縄斎の藩儒招聘に始まるので、縄斎から金陵へと折衷学の系譜が継承されたと言える。文政中、縄斎は学問所書生寮に遊学して諸藩士との人脈を構築し、これに続く増田貢・石井頼水らが江戸遊学時に亀田塾で金陵と接点を持ったことが後の仕官につながる。江戸の町儒者金陵が二〇年以上続いた月例の漢作文結社「文会」を核に形成した人脈は、全国的な広がりや多様な階層・年齢に亙った。結社での議論はいきおい海防や攘夷等の時務策に発展し、その幕府批判の舌鋒は鋭く、安政の大獄時には藤森弘庵など同人の累及者も出したほどである。だがその後の幕府改革により、文会の同人であり松崎慊堂門下の考証学者である安井息軒・塩谷宕陰とともに金陵は幕府に登用される。三人ともに「官学」本来の正学派朱子学とは関係がない。ほかにも幕末の学問所には中村正直・島田重礼等もあり、風雲急を告げるなか、学問所の学風は転換したとみるべきである。

幕末維新史の上でも、金陵とその三男桜陰、および金陵門下の動向は、無視できない史料を提供する。前述のように、金陵は松平春嶽へのルートがあって直接に私信のやり取りがあり、人材の推挙など具体的な建策が確認できる（27頁）。越前藩士橋本左内とも交流があった。本多正訥書簡からは、金陵ら儒者がいわゆる幕末三公子の間を取り持って情報伝達を行ったさまがうかがえる。また従来あまり言及されないが、金陵門下からは多くの勤王家が出ている（28～31頁）。久坂玄瑞は江戸再遊時に西洋医学の修学にあきたらず金陵に入門し、同門の河本正安・松田和孝・中村太郎や桜陰と親交を持った。松田・橋本は安政の大獄前後に亡くなり（一八五九）、河本が坂下門外の変に死してのち（一八六一）、久坂が長州から兵を率いて上京するのと時期を同じくして、中村と桜陰は天狗党の挙兵に共感して常陸に向かった（一八六四）。明治九年、久坂の親友楫取素彦（小田村伊之助）は、いまだ長州で復権がかなわない久坂の名誉回復のために遺稿集出版を計画し、金陵に

久坂の伝記執筆を依頼した（28～29頁）。金陵撰文にかかる「久坂通武伝」は恐らく最も早く纏められた久坂の伝記ではあるまいか。桜陰が久坂から贈られた書籍や松下村塾蔵版の明治初期刊本が多数残されていることも、金陵・桜陰父子と長州志士との交流を物語っていよう。

明治以降の資料にも見るべきものは多い。新設の清国公使館に赴任した清人たちと金陵との間に交わされた筆談（42・43頁）。家塾「逢原堂」関係資料（38・39頁）、および越前藩を辞した菅子が営んだ裁縫学校「逢原堂分校」関係資料。金陵の嗣子世経（政治家）関係書簡、その子幹一（学習院高等科教授、漢文学）の日記（46頁）等々。逢原堂の入塾記録からは著名人も拾い出せるほか、柏出身者も多く散見され、金陵とその子孫が柏地域の教育向上に貢献したことも見逃せない点である。

以上のように、芳野金陵と芳野家資料をめぐる論点は広範かつ多様で、今回の展示会やこの小さな図録で全てを尽くすことは難しい。これを初めの一歩として、今後も資料の整理・公開を進めていく考えである。これを機に各方面の関心が高まることに期待したい。

二松學舍大学文学部教授・大学資料展示室運営委員　町　泉寿郎

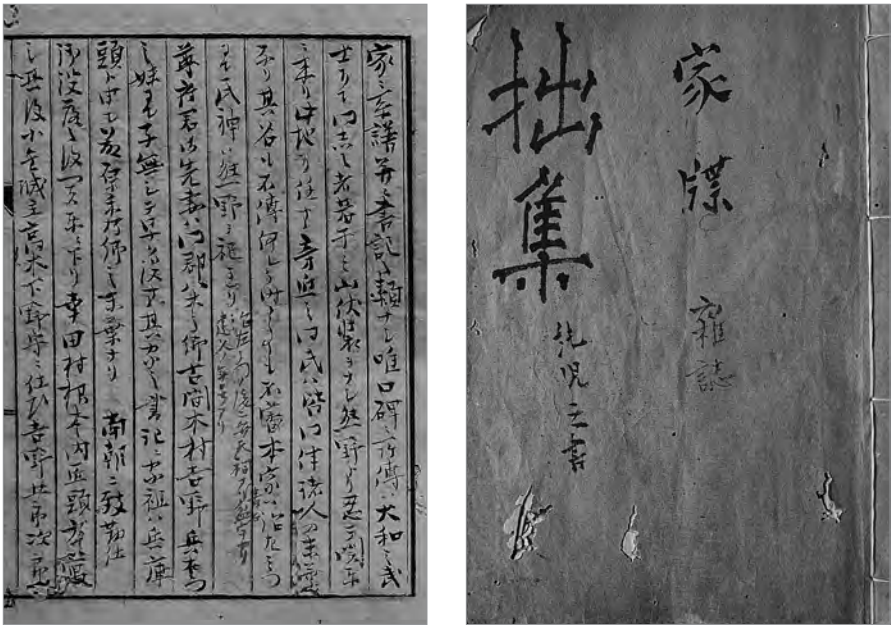
平成二七年九月三〇日

（謝辞）ここに柏市教育委員会と二松學舍大学の共催により、本企画展を開催できることは、大きな喜びである。関係各位に厚く感謝申し上げる。特に、平成二五年七月に柏市史編纂委員諸氏とともにご自宅を訪問して以来、芳野赳夫氏には全面的なご協力をいただき、本年三月に多数の書籍・資料を本学に寄贈いただく運びとなった。衷心から謝意を表したい。また、福井県立歴史博物館・福井市立博物館・芳野春生氏には資料閲覧に高配を賜った。記して謝意を表する。

I

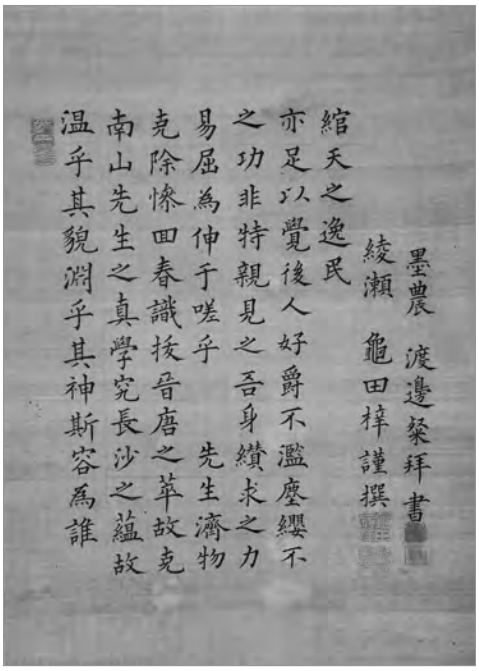
芳野家の歴史

―南北朝以来の歩み―



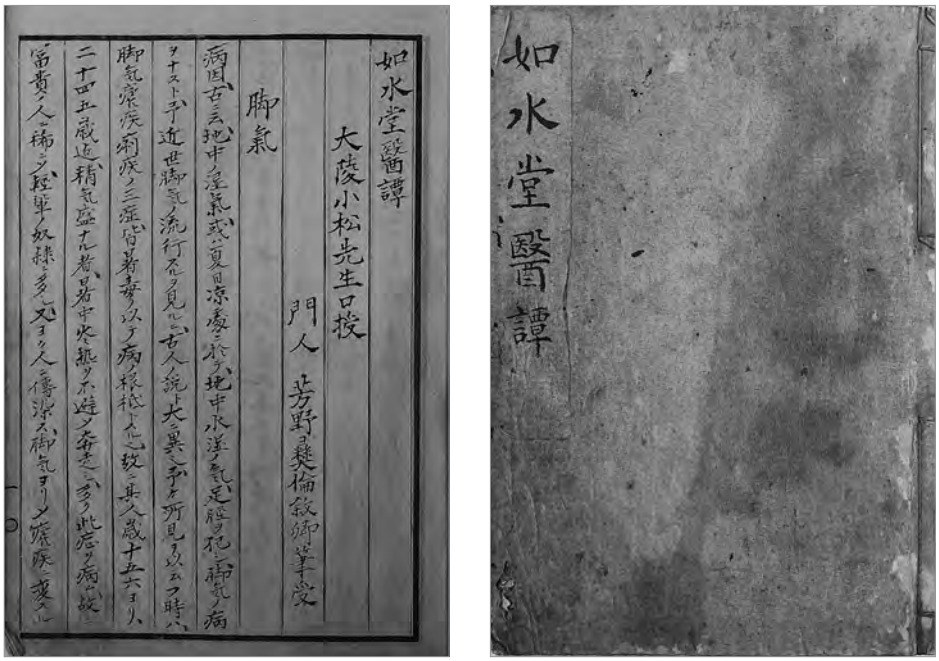
1 芳野金陵著『家牒』（芳野赳夫氏所蔵）

芳野家の先祖は大和国宇陀の芳野（ほうの）の出身とも言われ、家伝によれば南北朝期に南朝に仕えた武家で、南朝衰退により山伏に身を窶し熊野を経て関東に移住したという口碑が残る。そのうち下総国相馬郡松ヶ崎村に定住した者が金陵の直接の祖先であり、その時期は天正頃とも言われる。本家は治左衛門を称し、その分家に治兵衛・五右衛門等があり、江戸期には代々同村の村役人を勤めた家柄である。金陵は五右衛門家のさらに分家に生まれている。展示品は金陵が維新後に自らまとめた芳野家の歴史で、金陵自身や子女にまで及ぶ。表紙に直接書かれた文字は、「家牒」が金陵の筆跡で、「拙集」は早世した長男復堂（純蔵）の筆跡。



2　芳野南山肖像（芳野春生氏所蔵）

村役人の家に生まれた金陵の父南山（1766 ～ 1831、名を彝倫（つねとも）、字を叙卿）は、向学心が強く、分家して医業に従事し、傍ら学問を教えた。学問によって家名を上げたいとの気持ちが強く、50 歳（1815）で金陵を伴って江戸に出て豊島町に儒・医を開業したが、自分一身の満足よりも医療によって故郷に貢献する方が重要とさとり、間もなく郷里に戻った。展示品の南山肖像は、巻石堂家の伝来品で、医家の肖像にふさわしい被布姿である。学問によって家名を上げるという南山の志は、金陵に託された。

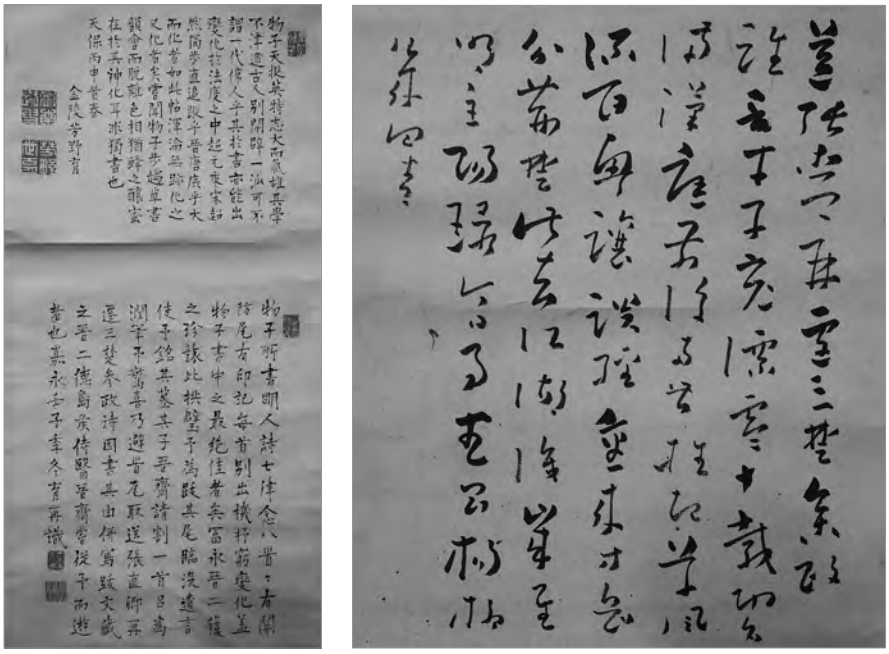


3　芳野南山筆写にかかる小松大陵『如水堂医譚』（芳野春生氏所蔵）

南山の医学は、小松大陵（和田東郭門）・奥村良筑・中西深斎・川越衡山など、京坂の古方系諸家を中心に学んだらしく、その写本が残る。ほかに下総の津田玄仙にも学んだ。展示品は、教育熱心な南山が、長男道斎が師事すべき医者を求めて京坂に出た折、小松大陵のもとで口授された医説を筆記したもの。

道斎（1799 ～ 1872、名克敬、字親仲、通称亀次郎）は父の言に従って大坂で小松大陵に学び、一時は秋田新田藩に仕官した。これが医家芳野家の本家（巻石堂家）である。巻石堂は臨床だけでなく医学塾を営んで医学教育も行い、常用処方をまとめた『巻石堂方函』（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）も編纂している。弟道紀（1809 ～ 1857、名衡、字士権・士平）は医家芳野の分家（如春堂家）を立てた。

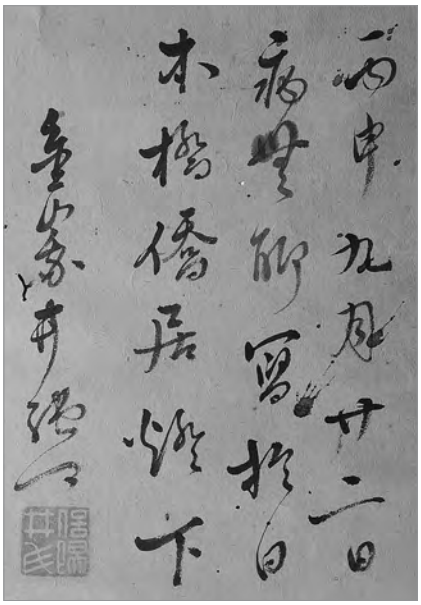
Ⅱ 金陵と近世儒学 ―近世後期儒学の諸派―



4　荻生徂徠（1666 ～ 1728）書「送杜帖」断簡、及び芳野金陵跋

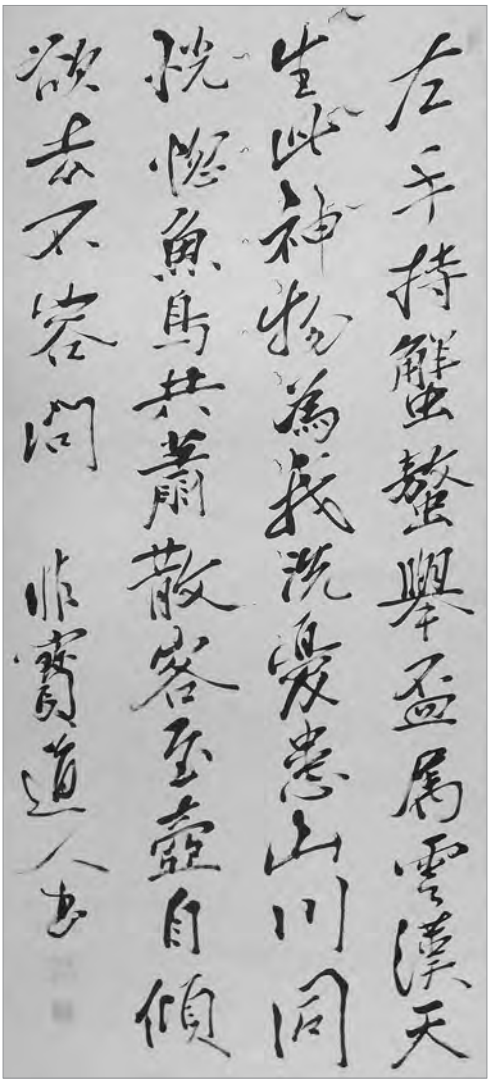
金陵の師である亀田綾瀬の父鵬斎は、井上金峨門下の折衷学派。折衷学の名は朱熹・王陽明・伊藤仁斎・荻生徂徠を取捨した金峨の『経義折衷』に由来する。

展示品は、金陵が門人富永晋二（徳島藩医）の入手した荻生徂徠揮毫の明人詩（律詩 28 首）に識語を依頼され（左上、1836 年）、富永歿後にそのうちの一首を割愛されたため、更に識語を認めて（左下、1852 年）、一幅としたもの。金陵の父南山には徂徠『辨道』『辨名』を注解した著書『二辨集詁』があり、金陵も徂徠の学と書を、唐宋を超越し魏晋に迫るものと高く評価している。



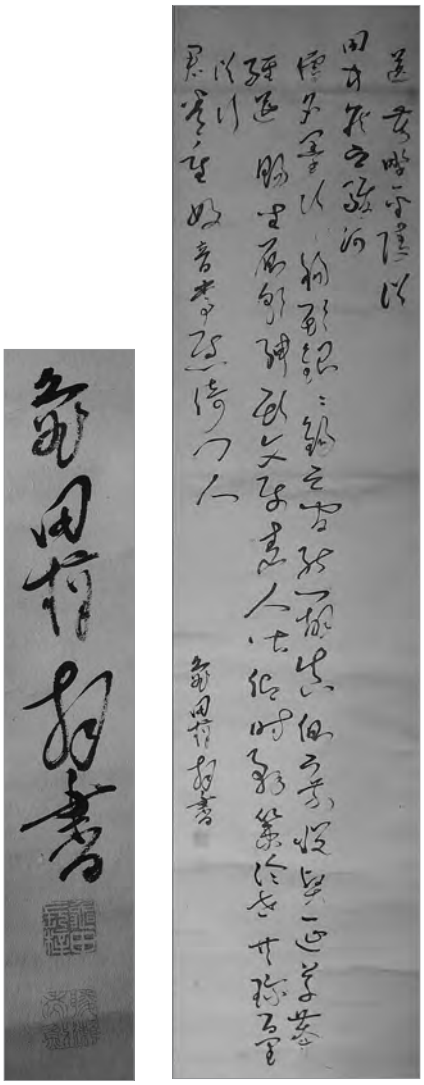
5　井上金峨（1732 ～ 84）画「山水」

寛政異学の禁により「異学の五鬼」と指弾され世に志を得なかった亀田鵬斎は、後年、木版印刷による山水画集『胸中山』を残した。鵬斎の師井上金峨も明和事件への連座など、その一生は順風とは言えなかったが、徂徠学批判から出発し折衷学・考証学に展開する学統を開拓して、多くの門人が輩出した。展示品は鵬斎山水画の源流というべき作で、金峨 43 歳（1776）、病中の揮毫。



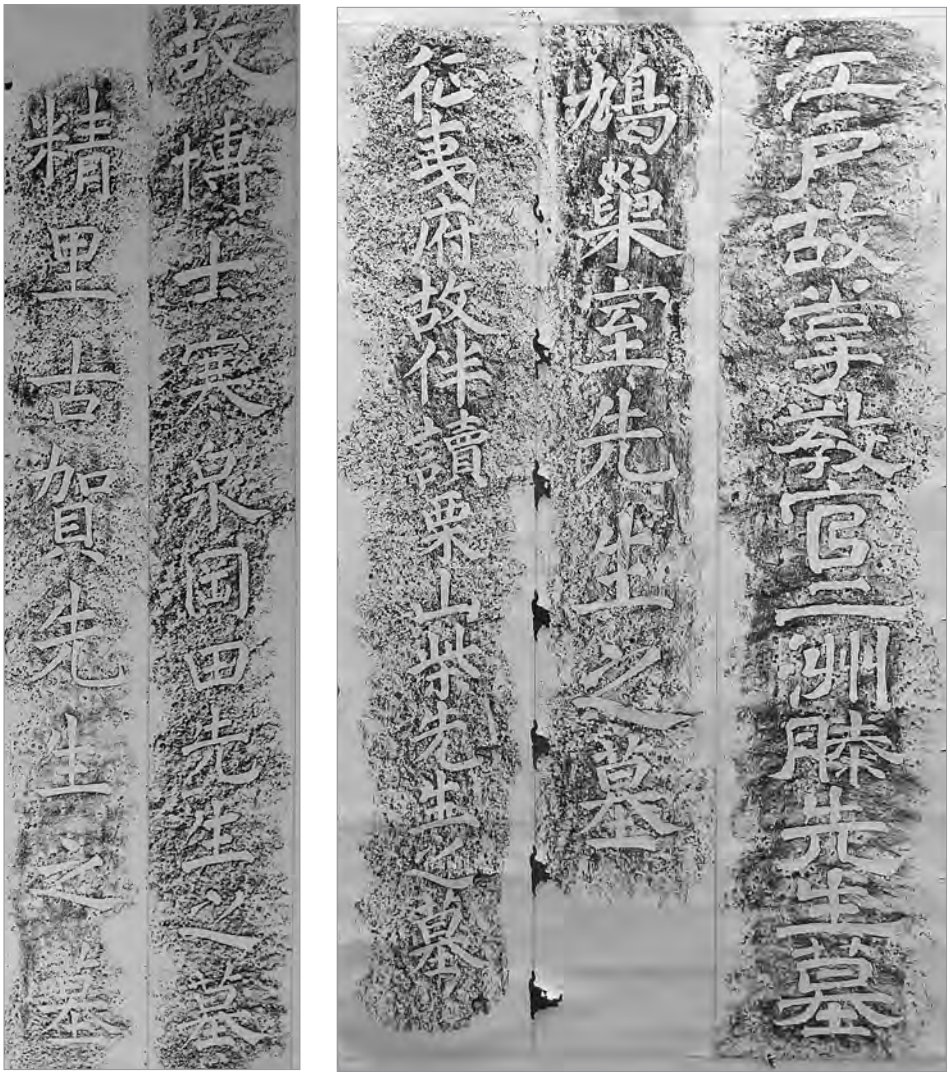
6　亀田鵬斎（1752 ～ 1826）五律書幅

化政期文人の典型と目される亀田鵬斎の学問（とりわけ経学）が本来、政治的実践への濃厚な関心を持つものであり、異学禁令の蹉跌によってそれが豪宕不羈な後半生に変容したことは徳田武氏らの指摘するところ。金陵は町儒者らしい文人的風致と政治的実践への関心を、ふたつながら継承した。そして皮肉にも幕末の政治的転換は、異学者の末裔たちを学問所の教官に据えることになった。展示品は鵬斎らしい飲酒の詩で、落款の「非宝道人」は数多い別号の一つ。



7　亀田綾瀬（1778 ～ 1853）書幅「送芳野金陵従田中侯之駿河」

文政 6 年（1823）、父南山に勧められ 22 歳の金陵が亀田鵬斎に入門を請うた時、鵬斎は既に 72 歳の高齢で、46 歳の嗣子綾瀬に師事することとなった。綾瀬の学と書は父の骨法を守ったもの。展示品は金陵が田中藩（現静岡県藤枝市）に仕官し、藩主の帰国に従って初めて田中に赴任するのを送った詩。真の儒者が少ない時世に、君側にあって学問文章と時務策を講じる金陵に期待を寄せている。



8　室鳩巣（1658 ～ 1734）・尾藤二洲（1745 ～ 1814）・柴野栗山（1736 ～ 1807）／岡田寒泉（1740 ～ 1816）・古賀精里（1750 ～ 1817）墓表拓本

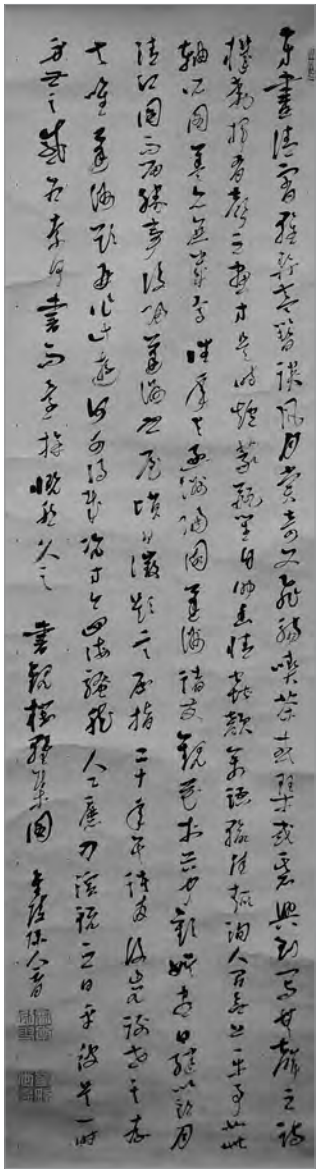
天明・寛政の交に登用された寛政三博士（柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里）のもとで、林家家塾は直轄の昌平坂学問所に改組され、正学派朱子学を掲げた幕府の文教改革が進められた。展示品は、学問所関係儒者の墓標拓本を合装したもので、右は柴野栗山・尾藤二洲に享保期の幕府儒者室鳩巣を配し、左は古賀精里と途中で代官に転出した崎門学者岡田寒泉を合装する。荒廃していた大塚先儒墓地の整備後の製作かと思われるが、学問所儒者に対する芳野家の敬意を感じさせる。

9　佐藤一斎（1772 ～ 1859）肖像（椿椿山原画・柳沢文真模写）

椿椿山（1801 ～ 54）揮毫による佐藤一斎肖像を、明治 18 年（1885）に模写したもの。一斎は美濃岩村藩に生まれ、同藩主家から出て林大学頭家８代を継いだ述斎に近侍。述斎歿後、1842 年に昌平坂学問所の儒官に抜擢されて幕末の儒学界に重きをなし、朱子学・陽明学にわたる多くの門人を輩出した。一斎歿後、期を同じくして学問所の組織改革が進められ、金陵ら文久の三博士が登用された。

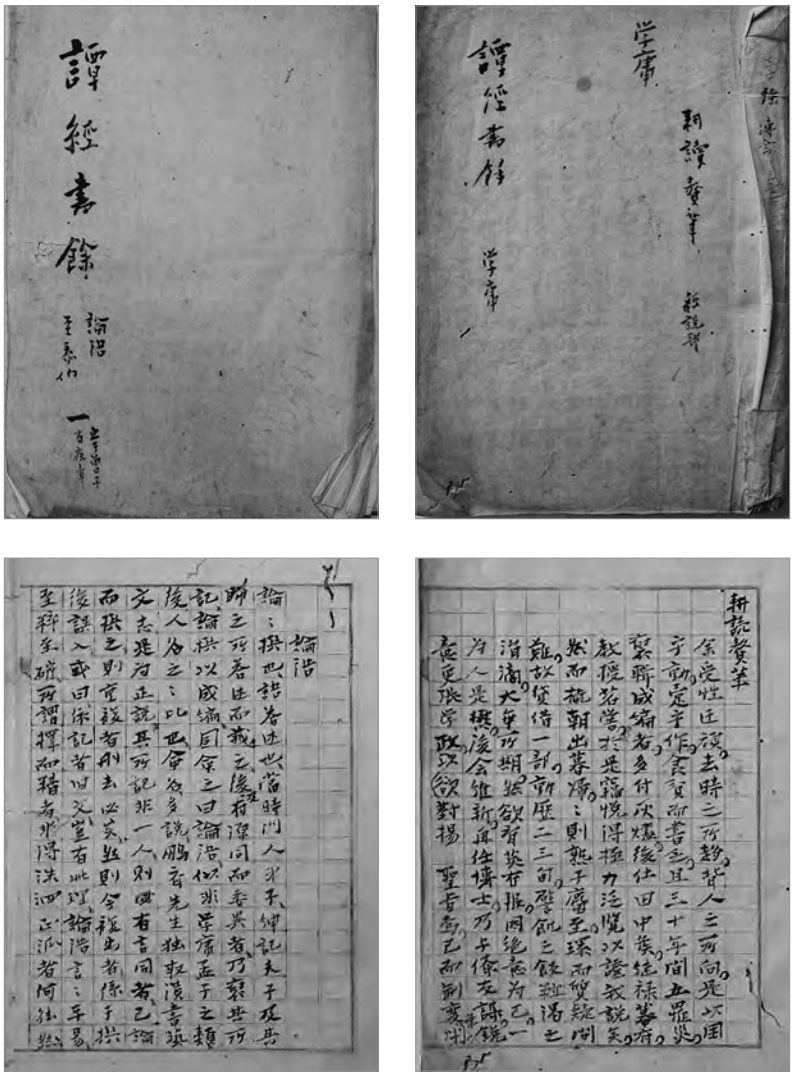
10　塩谷宕陰（1809 ～ 67）書　対幅

金陵と共に文久三博士として登用された塩谷宕陰と安井息軒は、共に林述斎門の松崎慊堂に師事して考証学を修めた。その晩年に主要著述をまとめた息軒に比べて、宕陰の学問の本色を示す著作は少ないが、その時務策は同時代に広く読まれた。作詩や書画に意を用いなかった宕陰の書作は遺品が少ない。右幅「山高月小是君子之風丰」、左幅「水落石出是豪士之骨格」。



11　芳野金陵（1803 ～ 78）書幅「書観桜雅集図」

大学を退官した後、大塚に隠棲した時代の金陵の書。明治 8 年 4 月 16 日、自宅の庭「占春園」に観桜の宴を開いて知友を招いた金陵は、知友からの詩文に題画を添えて『観桜雅集詩文』1 巻を作った（展示品 50 参照）。展示品はその雅集図の跋として書かれた。金陵の書は、鵬斎・綾瀬の書風を汲みながら独自の風格を備えている。

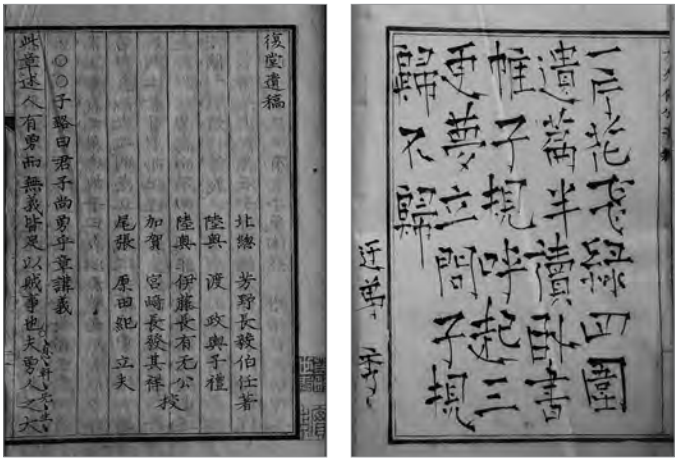


12　芳野金陵『譚経書餘 論語・学庸部』半２冊（論語部存１冊 学庸部１冊）

明治６年（1873）序・自筆本。『論語』、及び『大学』『中庸』の注釈書。表紙にはいずれも「譚経書餘」、また各々「論語」「学庸」とあるが、学庸冊は別に「耕読贅筆」と題し「経説部」とあるため、本来は別個であったものか。論語冊は第一冊泰伯篇のみの現存で、篇ごとに章句の形式で注釈され、孔安国、皇侃など諸注の引用が散見する。学庸冊「耕読贅筆」は、その名の通り金陵が明治６年（1873）、大学中博士を免官後に購入した大塚の土地を開墾する傍らまとめたもの。特に篇、章立てにはなっていない。なお学庸部は、後に金陵四男世経の嗣子幹一により書写された副本が２部作られている。

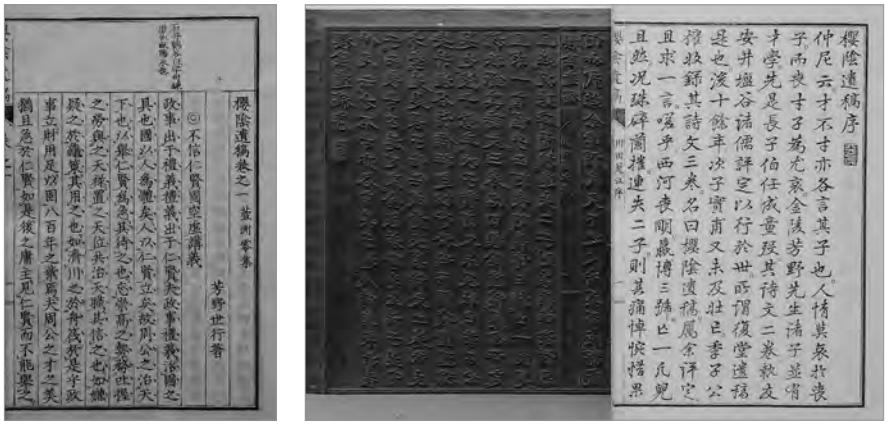
13　芳野世育（金陵）著　渡政輿等校『金陵遺稿』10 巻 半 4 冊

明治 10 年（1877）逢原堂芳野世経刊本。金陵の各種論考、序文、墓碑銘、伝記、画賛などを集めたもの。「宕陰存稿序」「息軒遺稿序」「尾台士超墓碑銘」「本間棗軒墓碑銘」「鵬斎亀田先生伝」「久阪通武伝」などが収められ、そこからは自ずと金陵の交友関係が垣間見える。四男世経により芳野家逢原堂から出版された。展示品は校正刷りで、誤字誤文のほか、字体字形の細かな修正から印刷時のよごれまで、丁寧に校正が施され、該当箇所には訂正刷りが貼付されている。



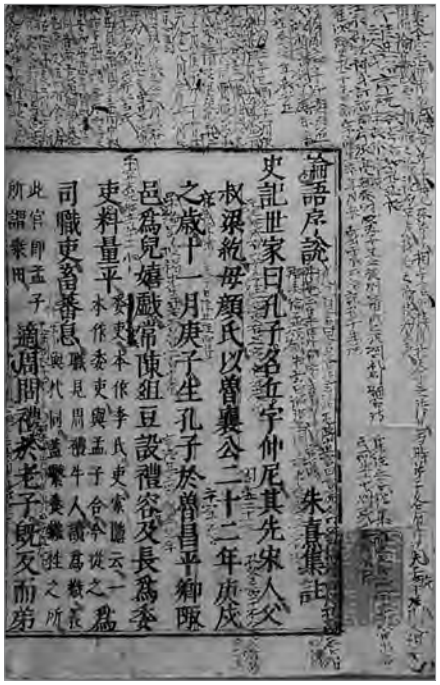
14　芳野長毅伯任（復堂）著　尾台武子順等校『復堂遺稿』5 巻 半 2 冊

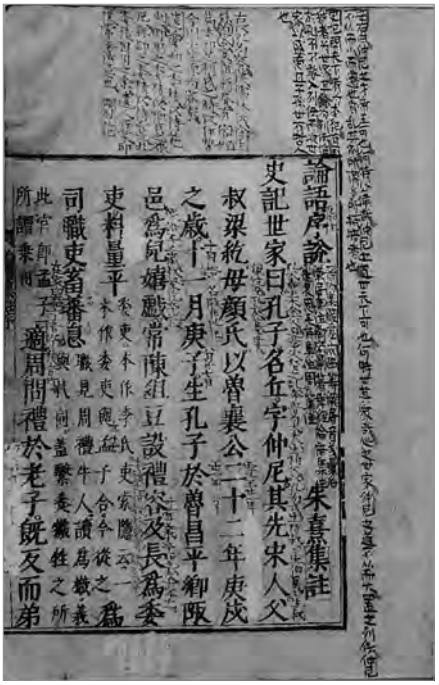
安政 4 年（1857）識語逢原堂刊本。金陵長男、復堂（1830 ～ 45、名長毅、通称純蔵、字伯任、号復堂）の遺稿集。乾坤の 2 冊からなり、乾冊は詩、坤冊は文を収める。『金陵遺稿』と同じく芳野家逢原堂の私家版のため、版木も残されている。復堂は、幼い頃より学問を好み、孝経、四書五経を母つな（亀田綾瀬門人清水純斎姉）より受け、のち亀田綾瀬に入門するが、病のため、16 歳の若さで没す。



15　芳野世行（桜陰）著『桜陰遺稿』5 巻 半 3 冊

明治 11 年（1878）逢原堂芳野世経刊本。金陵三男、桜陰（1844 ～ 72、名世行、通称甃六郎、秀六郎、のち新一郎、字実甫、号桜陰）の遺稿集。父、兄の遺稿集と同じく逢原堂から弟世経により出版され、版木も残る。桜陰は、兄復堂と同じく、母より学問を受け、田中藩藩校日知館、昌平坂学問所の助教を歴任する。

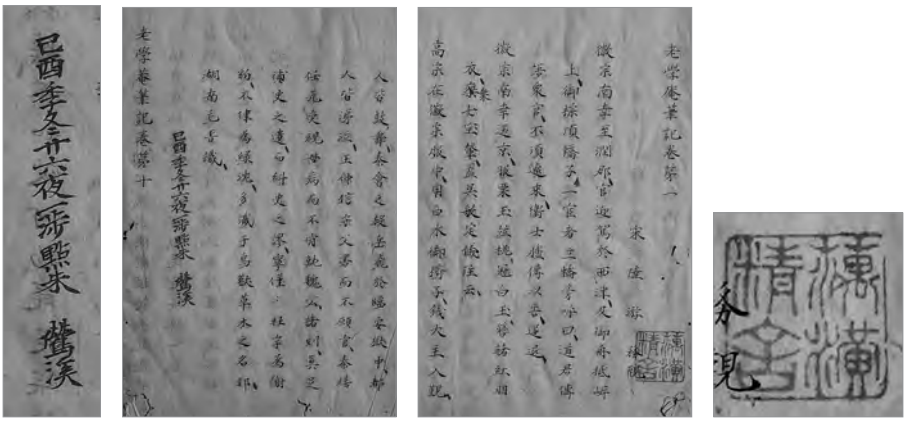




16　宋 朱熹撰『四書集註章句』

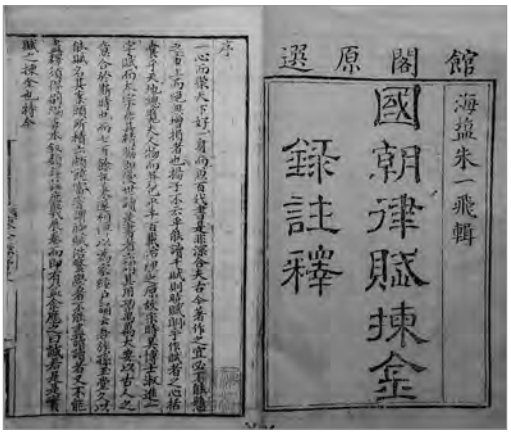
（大学章句 1 巻 中庸章句 1 巻 論語集註 10 巻 孟子章句 7 巻）半 6 冊

明和 3 年（1766）京都勝村治右衛門刊本。南宋朱熹による『大学』『中庸』『論語』『孟子』注釈書。芳野家には 5 点現存し、いずれも眉欄行間には諸家諸文献の引用など詳密な書入れが施されている。それら書入れは金陵のみによるもののほか、桜陰、世経など複数者の手が入ったもので、各点共通する書入れも多い。



17　宋 陸游撰『老学庵筆記』10 巻 半 3 冊

江戸期鈔、嘉永 2 年（1849）林鶯渓朱点本。林復斎旧蔵。南宋の詩人陸游による随筆集。印記「藕潢精舎」は、第 11 代大学頭林復斎（1801 ～ 59、林述斎第六子、名燼、通称式部、字弼中、別号梧南、藕潢）の蔵書印で、識語の鶯渓（1823 ～ 74、名晃、通称都賀太郎、図書助、字伯華）はその長男。「己酉」は嘉永 2 年（1849）にあたり、鶯渓 27 歳。復斎は、本来第二林家であったが、嘉永 6 年（1853）、本家大学頭家を継いでいた甥の壮軒（1828 ～ 53）が死去したため、大学頭を継ぐ。金陵が昌平坂学問所付の幕府御儒者に登庸されたのは、復斎没後。

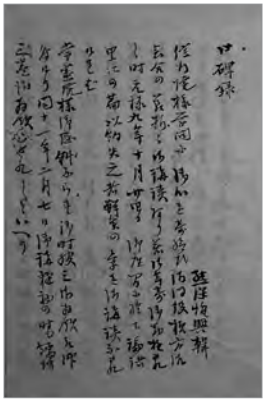


18　清 朱一飛編『国朝律賦揀金録初刻』12 巻 大 4 冊

清・乾隆 57 年（1792）刊本。林復斎旧蔵。清朝の律賦集。本書も前掲『老学庵筆記』と同じく、印記「藕潢精舎」のある林復斎旧蔵書。国内の現存は稀少で、内閣文庫には昌平坂学問所旧蔵本として本書と同版が所蔵されている。

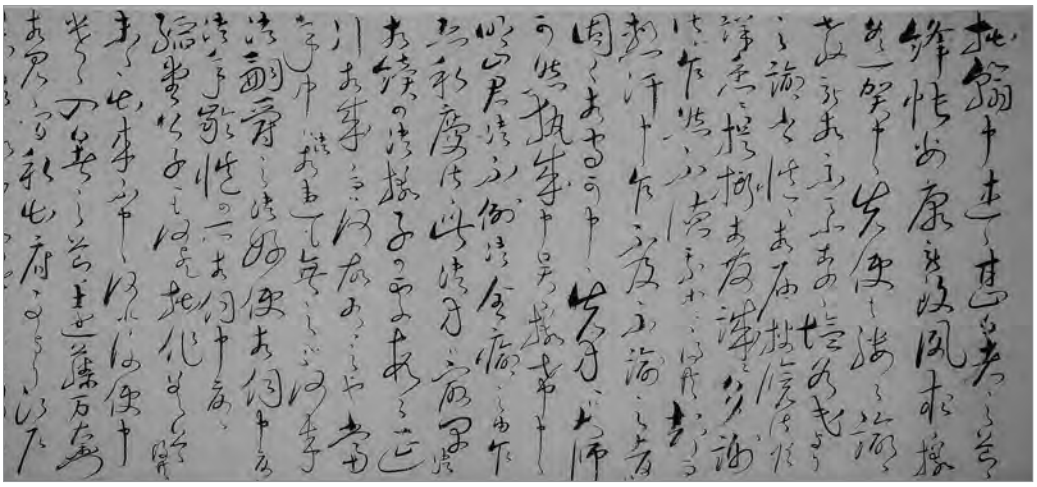
19　芳野金陵『東帰念日記』

弘化４年（1547）、金陵は本多家第７代田中藩第５代藩主本多正意（1784～1829）の儒官となり、嘉永３年（1850）９月、正意が封地に就くに従い、監察に当たった。本書は、その帰路、湯治のため立ち寄った伊豆修善寺での記録。朱筆が入った仮綴本の稿本と成書本の２点が残る。また『金陵遺稿』にも全文が収められている。



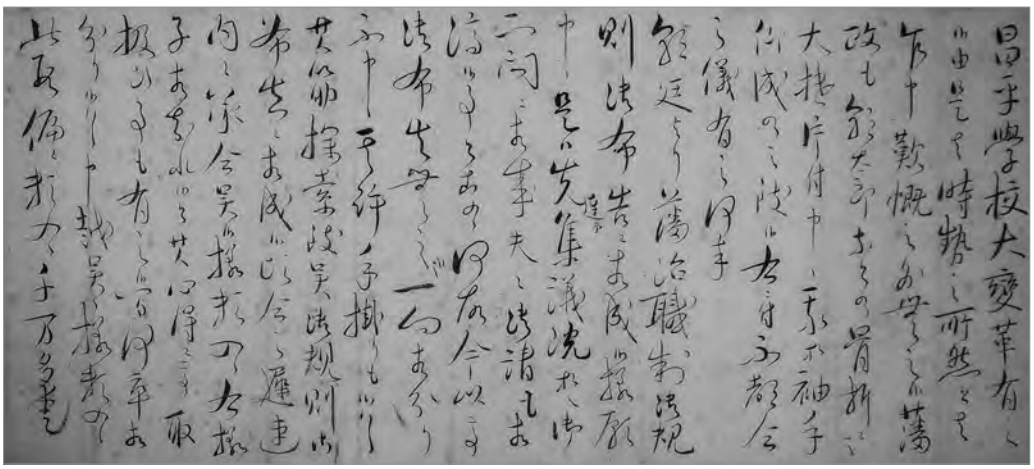
20　熊沢惟興『口碑録』

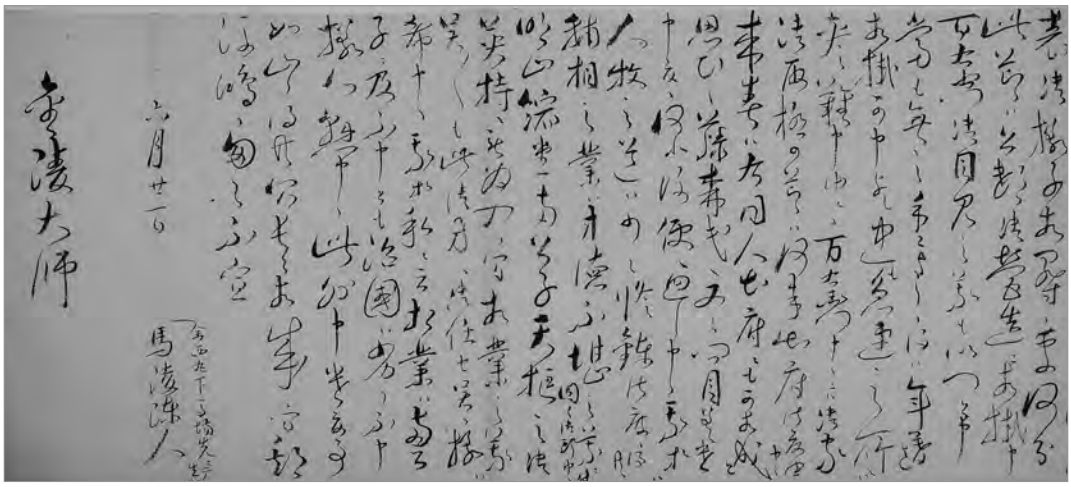
田中藩藩主本多家歴代の人物像、逸話、また各代の藩内における事跡を記したもの。文政８年序（1825）。その記録は本多家が田中藩に国替えになる以前、沼田藩初代藩主正永（1645～1711）からはじまり、第３代正矩（1681～1735）時代の田中藩への国替えを経て田中藩第３代藩主正供（1746～77）まで５代にわたる。熊沢惟興（1791～1854、字伯熊）は、昌平坂学問所に学び、田中藩藩校日知館の教授となる。芳野家にはこの他『海外考証元寇私記』などの熊沢著作が伝わる。



▲ 21　本多正訥書簡（安政 4 年〈1857〉6 月 22 日）

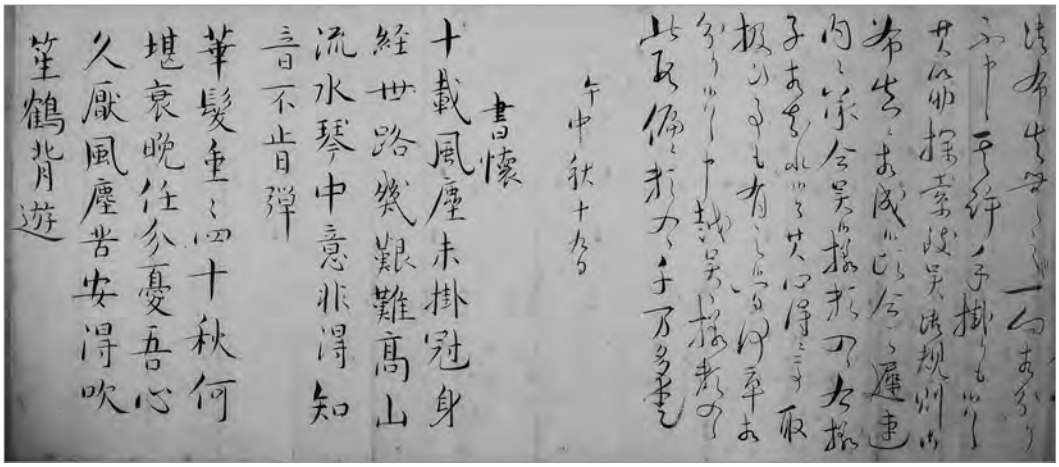
田中藩儒としての金陵は、前藩主正意（まさおき）の七男正訥（まさもり）（1827 ～ 85、初名鉾五郎）の教育に当たり、正訥を八代正寛（まさひろ）の継嗣（世子）に擁立することに尽力。正訥が世子となって（1856）、金陵の藩内での立場は高上した。好学の正訥は唐津藩の小笠原長行、高鍋藩の秋月種樹（たねたつ）とともに幕末三公子と称され期待を集め、襲封後は幕府から学問所奉行を拝命し、金陵らを文久三博士に任じて学問所改革が進められた。展示品の正訥書簡は、将軍拝謁（前年に世子となり、この年 11 月に拝謁）の日程が決まらないことを伝え、また交流のあった小笠原長行（明山）・秋月種樹（縮堂）のことを話題にし、輔相（幕政輔佐）の点では二人に及ばないので治国（領国経営）に務めたいと抱負を語っている。21 書簡からは金陵ら儒者が三公子の間の情報伝達役を果たしていたことがうかがえる。

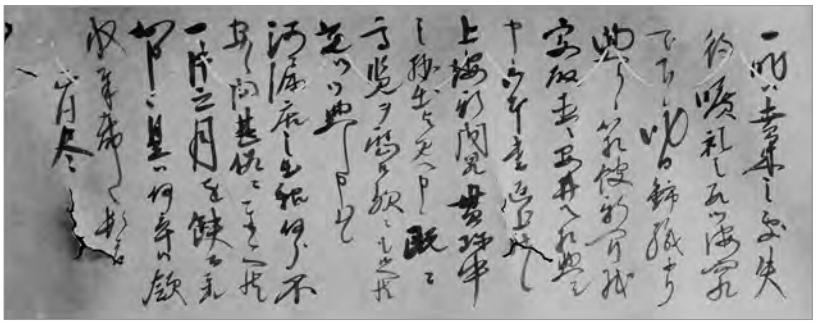




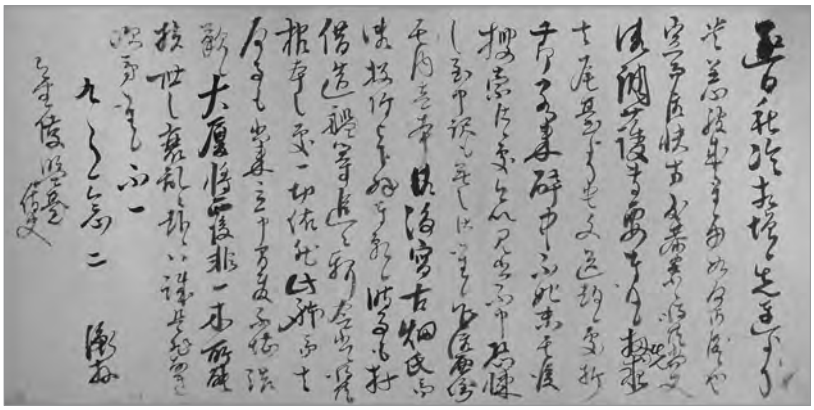
明治３年７月、大学が廃止され金陵が免官になったことを旧主正訥に報じたのに対する返書。明治２年６月の版籍奉還により、この時正訥は長尾藩知藩事を拝している。翌４年７月には廃藩置県によって長尾藩は長尾県となり、11 月に木更津県に、さらに千葉県に編入される。書簡の内容は、知藩事職の職制規則がいまだ布告されず不明のため、金陵に関係方面に探索して、いつごろ布告の見通しか知らせてほしいとの文面である。

▼ 22　本多正訥書簡（明治３年〈1870〉８月 19 日）





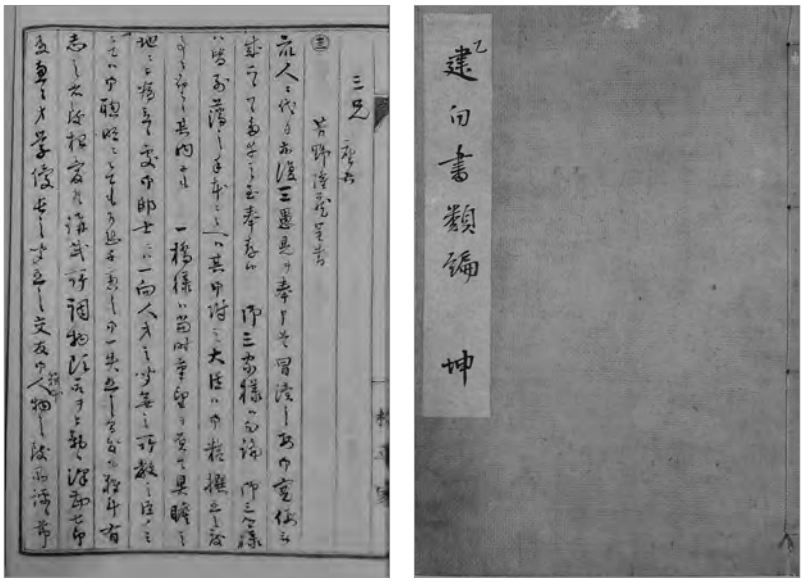
23　金陵宛塩谷宕陰書簡（某年正月末日）



24　金陵宛安井息軒書簡（嘉永 6 年〈1853〉9 月 22 日）

内憂外患の幕末、金陵がそれをどのように見ていたか、時の政治に対して儒者としてどのような問題意識や改革案を持っていたか、従来ほとんど明らかにされていない。いわゆる「時務策」に関して、『金陵年譜』は次のように記している。西洋船舶が日本中に出没する状況を心配し、海外情勢を知るために知人と「支那新報・和蘭口単等」を閲覧し、「開鎖ノ得失、防禦ノ利害」を検討した、と。展示品 23・塩谷書簡は、箱館や上海のニュースが彼らの間で交換されている様を伝えている。

また海防策を明示せず事勿れ主義に終始する幕府政策を、金陵は「和戦決セズ国是定マラザルヲ以テ彼ト折衝ス。彼ノ峻拒シテ肯セサル、知ルベキノミ」と看破している。展示品 24・安井書簡（嘉永 6 年 9 月 22 日）は、6 月 22 日に 12 代将軍家慶が歿し、7 月に家定が継承。幕府は 9 月 15 日に諸藩の大船建造を解禁し、また海防の費用に充てるために旗本に知行に応じた醵金を布告した。息軒はこうした弥縫策では国難を乗り切ることはできないと見て、幕府政策を厳しく批判している。金陵もこれと同意見であったと考えてよい。



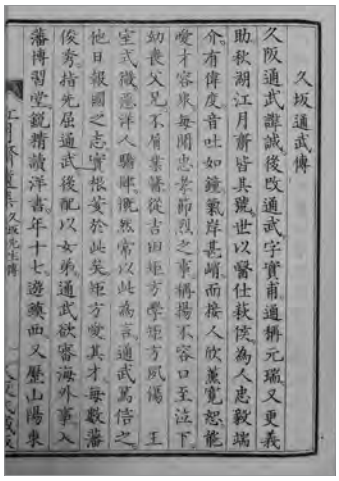
25 芳野金陵建白書（文久２年〈1862〉、松平春嶽宛）

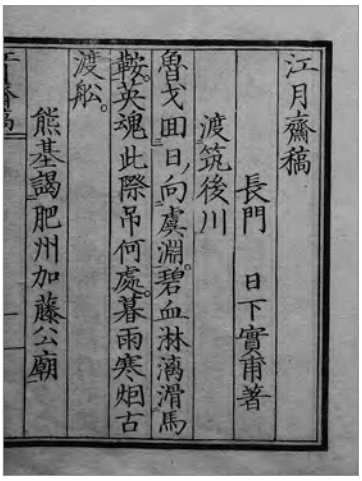
井伊体制崩壊により復権した松平春嶽に宛てて、金陵は文久２年に十数度にわたって建白書を提出している。内政についての金陵の考えが分かる資料。

６月13日建白（福井市立博物館所蔵）では、八州廻同心に対する怨みや、江戸府内と郊外との門制等の格差が、江戸近郊の民衆の不満となっていること。安政の大獄の罪人に対して、早急かつ遺漏のない大赦が必要であること。また人材として、小笠原長行を推挙している。

展示品に収録される文久２年閏８月から12月までの14通の建白書のうち、閏８月17日建白では人材推挙が述べられ、一橋家に澤勘七郎、三奉行に土岐野州・佐々木某・秋山某を推す。閏８月18日建白では故徳川斉昭を恩赦して、朝廷と幕府との関係修復をはかることを説く。閏８月20日建白では、蝦夷地に大名を移封し、その元高の十万石程度を内裏普請などの費用に充当することを説く。９月６日建白では、福井藩賓師横井小楠を熊本藩に帰すように、また小笠原長行を老中に列するよう説く。日時不明の建白では、松平定信の始めた七分積立を使って、物価高騰と疫病流行に苦しむ江戸市民を救恤するように説く。将軍上洛については、200年来廃絶していた盛典の再興と歓迎し、陵墓の修築などを説く。

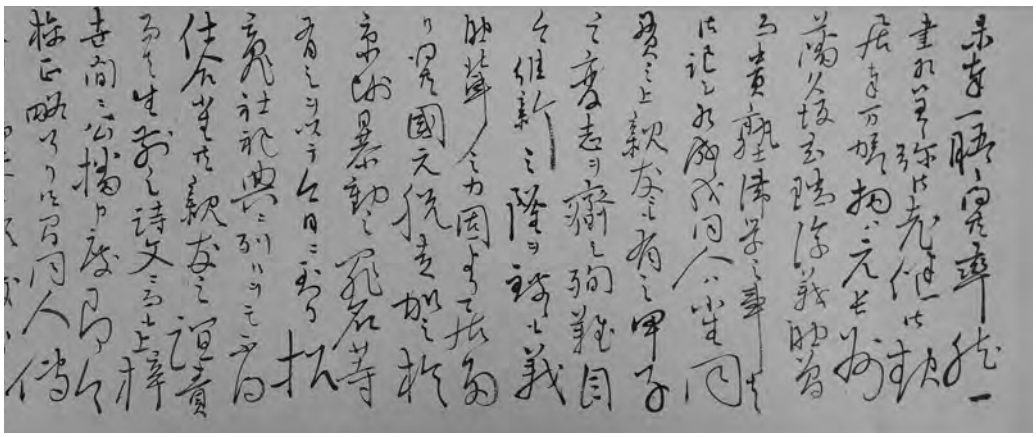
12月25日建白では、思いがけず学問所儒者に召し出されたことに対して、感謝しつつも、異学派からの登用は林家も不快に違いないし、学問所奉行（本多正訥・秋月種樹）と三博士が党を結ぶように誤解して、林家と間隙を生じはしまいかと懸念している。





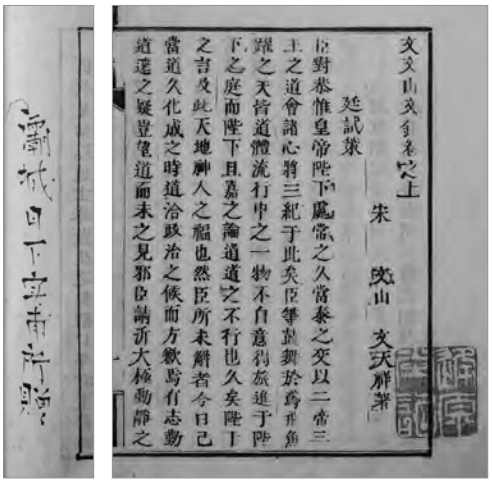
27　金陵撰「久坂通武伝」　26　久坂玄瑞『江月斎稿』（1868 年刊）

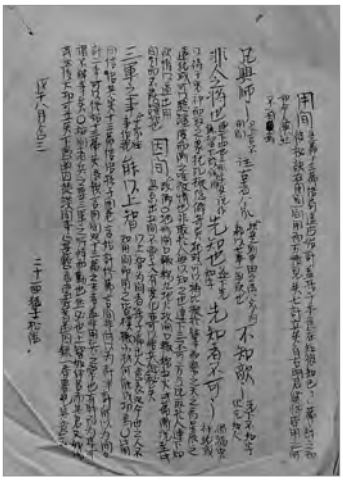
長州藩医の家に生まれ吉田松陰に学んだ久坂玄瑞（1840 ～ 64）は、20 歳で江戸再遊学時に、幕臣羽倉簡堂の仲介により金陵に入門。同年輩であった金陵の三男桜陰と親しく、金陵も久坂を福井藩江戸屋敷に使いさせた際に「長州屈指の才人」と紹介している（福井県立歴史博物館・小出家資料）。展示品 26 は久坂の遺稿集で、高杉晋作『投獄集』と共に刊行された。展示品 27 は後に親友の楫取素彦が久坂の遺稿集を再編した際に、楫取から依頼されて金陵が執筆した久坂の伝記。



28　楫取素彦書簡（芳野金陵宛、明治 9 年 3 月 14 日付）

長州藩士楫取素彦（1829 ～ 1912、1876 初代群馬県令）は吉田松陰の妹寿を妻とし、後に久坂玄瑞の未亡人文（松陰末妹）と再婚。長州での久坂の名誉回復のために上記の遺稿出版を計画し、金陵に伝記の執筆を依頼した。金陵が撰述した伝に対して、楫取は長州藩の立場から一部修訂を要求している。

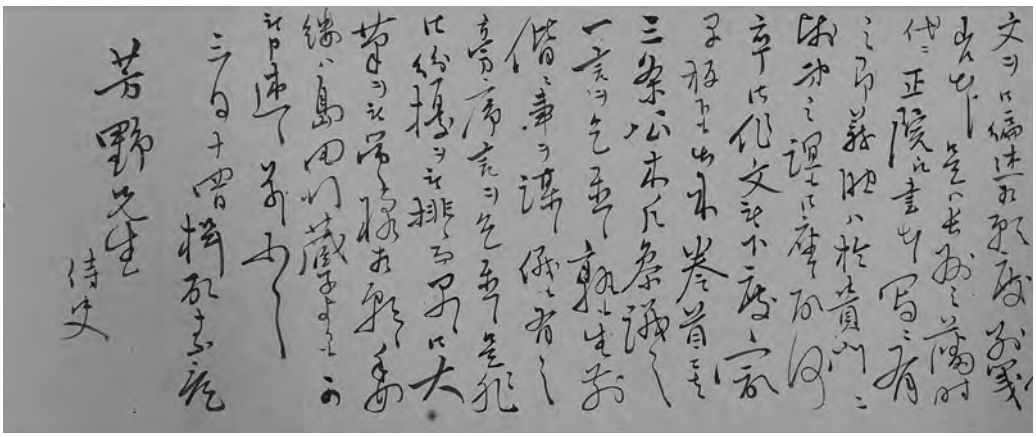




30 久坂玄瑞旧蔵『文文山文鈔』2 巻　29 吉田松陰注『孫子』（安政 5.8.23 成）

松陰注『孫子』は江戸に護送される時に久坂に贈った自筆本が著名であり、安政 4 年 9 月 15 日跋・安政 6 年 5 月 10 日再跋をもつが、展示品 29 は成書年時が異なる。志士間に写本で流通した一本と見られ、芳野家伝本は久坂に由来する可能性がある。

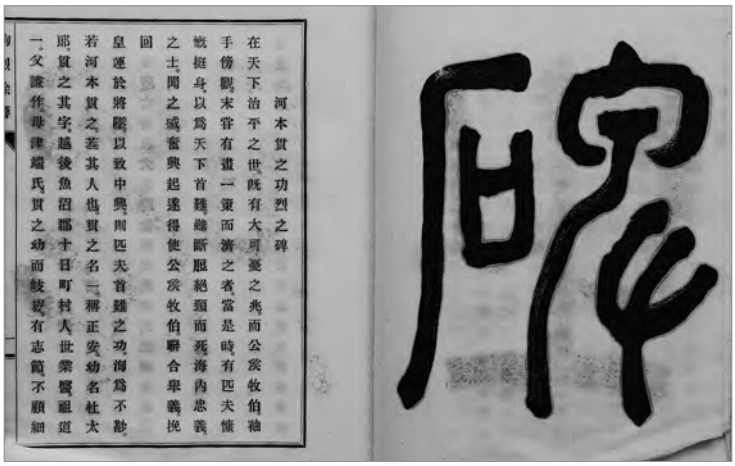
展示品 30 は久坂から桜陰に贈られた『文文山文鈔』。節義に殉じた南宋の文天祥の詩文は志士たちに愛誦された。



その後も一部の記述をめぐって楫取と金陵の間で応酬があった。これを反映してか、『江月斎遺稿』所収の「久坂通武伝」と、金陵の『譚故書餘』所収の伝との間には若干の異同がある。また金陵の執筆に報いる意図もあったものか、翌年、楫取は最後の林大学頭家の当主林昇（1833 ～ 1906、学斎）を群馬師範学校の教員として招聘している。

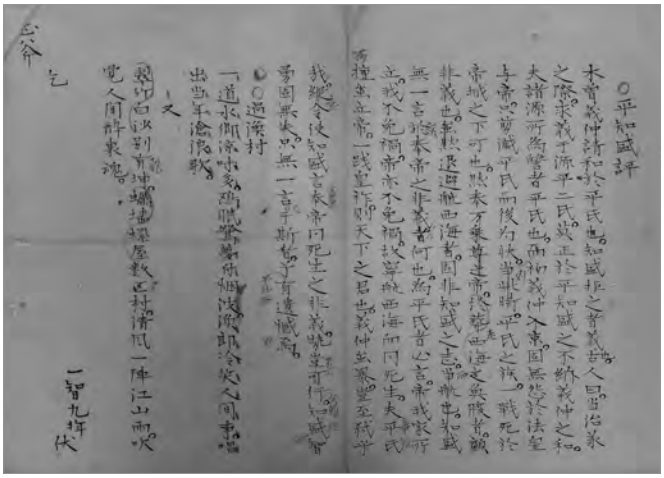
31　松田和孝自筆『詩吟聞録・聞見詩集』

松田和孝（1837 ～ 59、通称誠治郎、号蓼水）は福井藩士で金陵門人。井伊政権下、藩主松平慶永が蟄居となったことに憤り切腹した。展示品は 1856 ～ 57 年に松田が詩文を筆録したもので、幕末志士の性向をよく伝える。芳野家資料には弟松田直人編にかかる『蓼水五十年忌辰旧懐稿』『蓼水存稿』も伝わっている。



32『殉列餘響』（明治 22 年 1889 刊）

河本正安（1840 ～ 62、通称杜太郎・正安、名・貫之）は越後十日町出身で、金陵と亀田塾の同門で親交があった医者尾台榕堂の義弟にあたる。坂下門外の変を起して亡くなった。展示品は河本の遺稿集で、この時に顕彰碑（山縣有朋題字）も建てられた。芳野家資料には河本の自筆草稿や旧蔵書も伝わる。

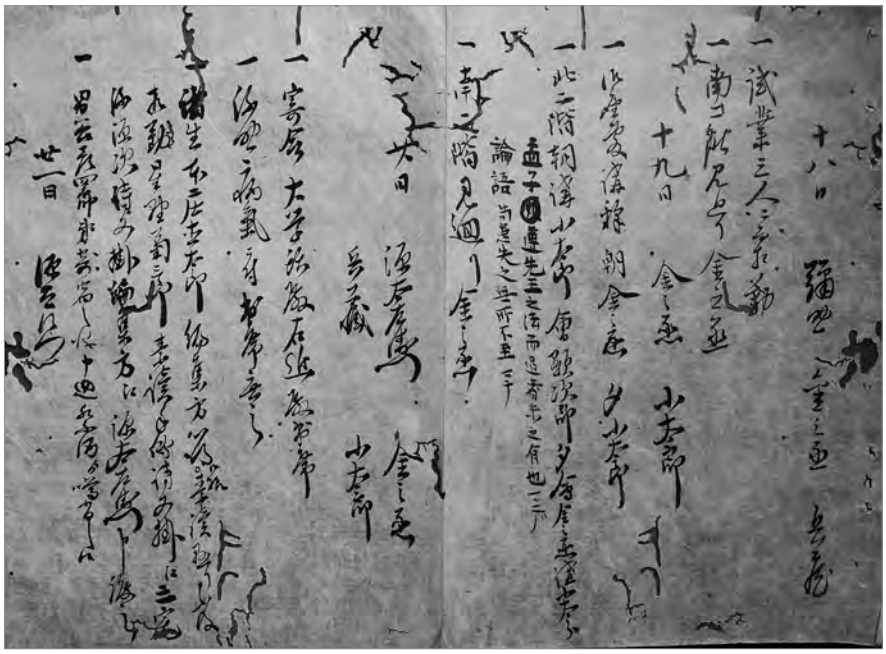


33　中村太郎（1844 ～ 64、名一智、号疎狂）草稿

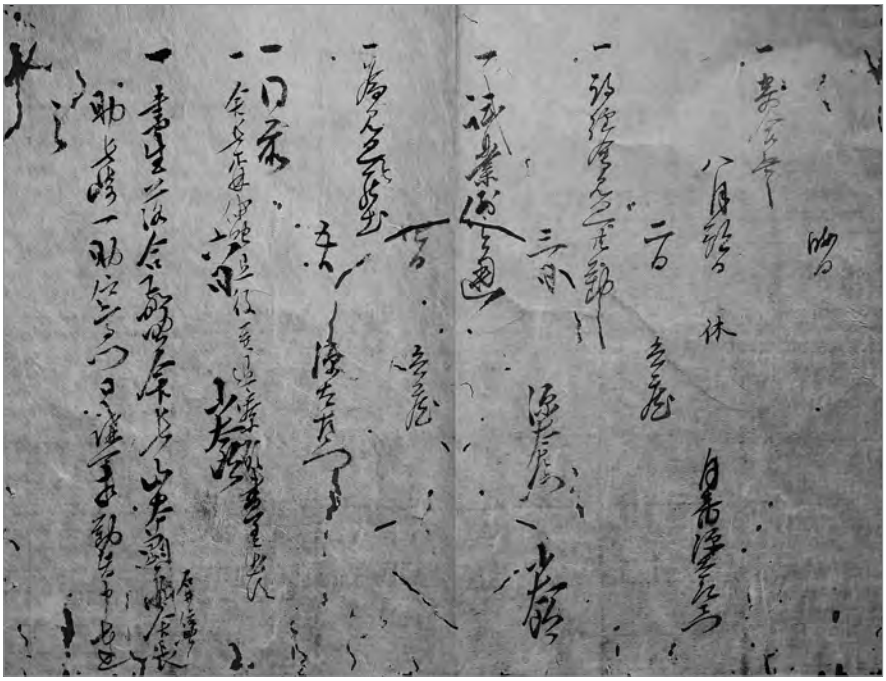
中村太郎は田中藩士で金陵門人。天狗党の乱に呼応して同志を募り鹿島に向かったが、幕府軍に捕らえられ処刑された。

34　芳野桜陰（1844 ～ 72、名世行、字実甫、通称秀六郎・甃六郎）の捜索命令

芳野桜陰は、父および安井息軒・塩谷宕陰に学び、万延元年（1860）に田中藩校日知館助教となり、ついで父が学問所御儒者に転じると、文久 3 年（1863）に学問所助教を拝した。元治元年（1864）、久坂玄瑞は前年 8 月 18 日の政変によって長州勢が京都を追われた後の失地回復に奔走し、禁門の変を起こす。他方、攘夷決行を求める水戸藩士が筑波で蜂起し（天狗党の乱）、尊皇の志篤い桜陰はこれに呼応して水戸に向かい、9 月に鹿島の大船津で幕府軍に敗れて捕えられ投獄された。展示品は、前年 10 月 25 日に桜陰が出奔したと金陵から幕府に届け出たのに対して、幕府から更に捜索するように命じた文書。

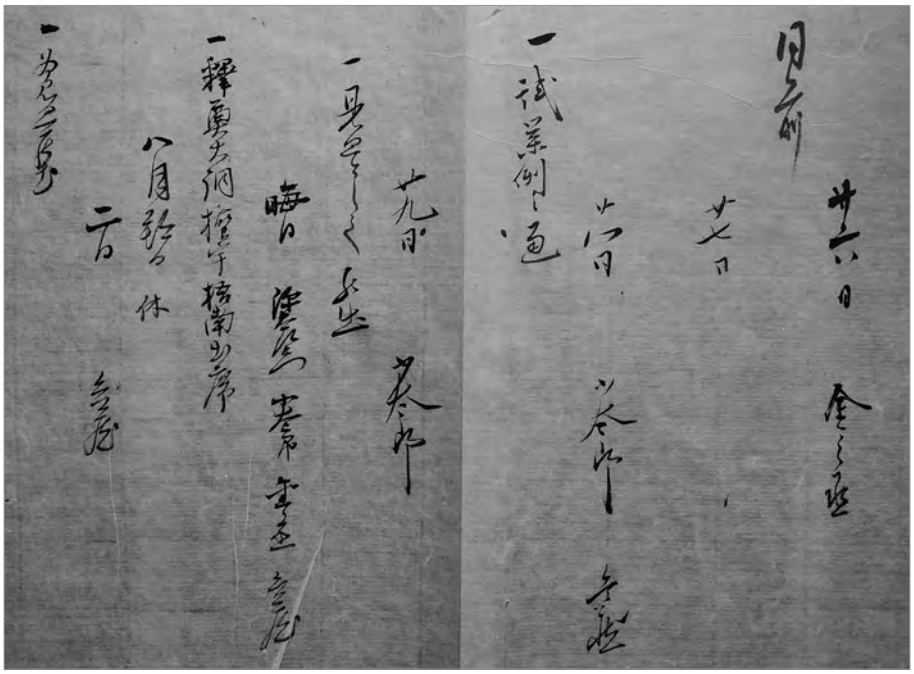


35 文化10年『昌平坂学問所日記』



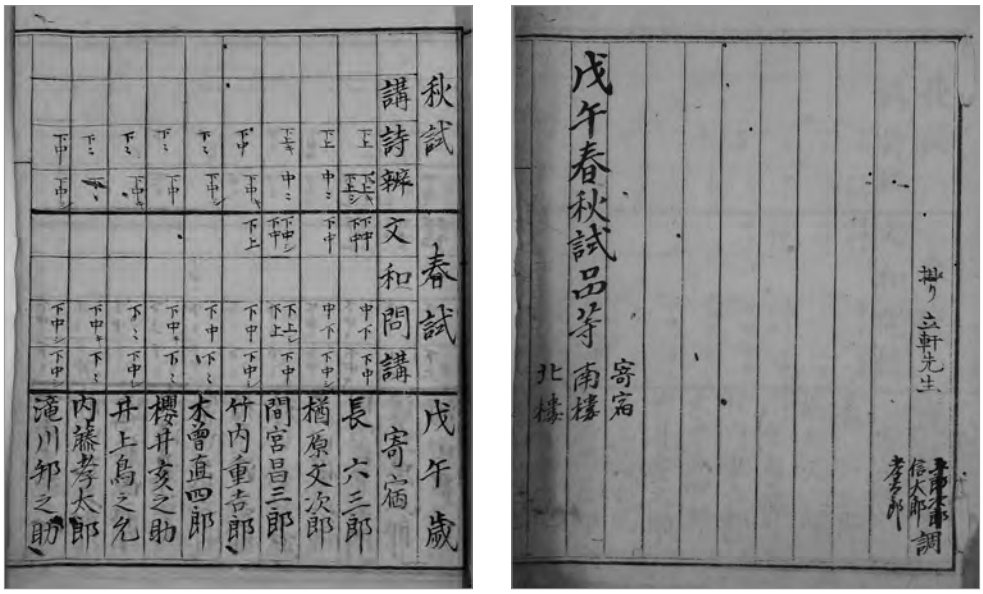
36 文政8年『昌平坂学問所日記』

8月6日の条、田中藩儒の石井縄斎（俊助）が書生寮の舎長助を拝命している。



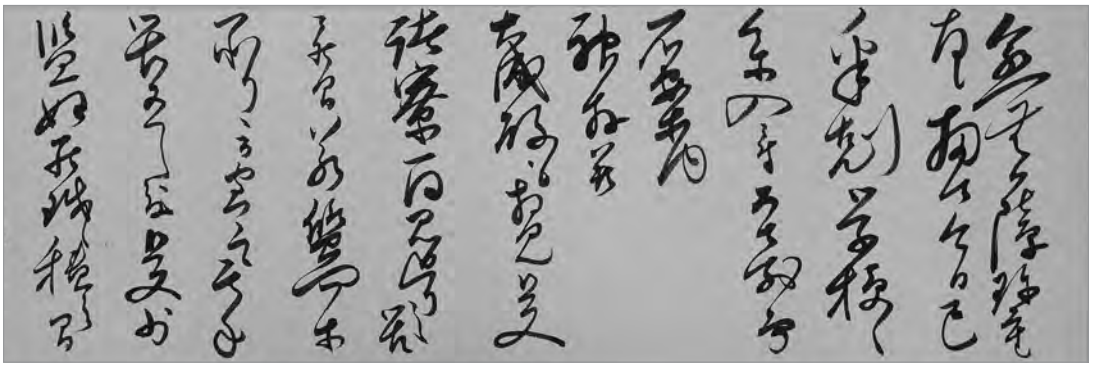
37　天保 10 年『昌平坂学問所日記』

直轄化以後の学問所では、当番儒者によって日々の講義・教官の寄合・学生の進退などを記録した公用日記が作られていた。日記を含む学問所の公文書は、学問所が維新政府に移管されて大学となり、その大学が廃止された時に帰属を失い、芳野家が管理するところとなったらしい。その後、第二次世界大戦前後に学問所関係文書の大半が芳野家から流出し、筑波大学図書館（昌平坂学問所文書）に現蔵されている。現存する 1800 年から 1862 年におよぶ日記原本のうち、15 年分は完全に欠けており、9 年分に残欠があるが、今回、芳野家から発見された日記は、文化 10 年、文政 8 年、天保 10 年の欠落部分に当たる。弥助（古賀精里）・源太左衛門（依田利用）・金之丞（増島蘭園）・兵蔵（野村篁園）・小太郎（古賀侗庵）らが輪番で記録していることが分かる。比較的初期に属する文化期の日記がわりあい詳密であるのに比べ、天保期の日記はかなり簡略な記述になっている。



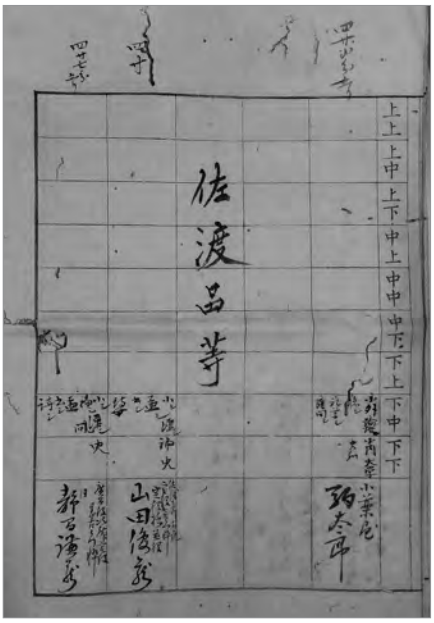
38『戊午春秋試品等 寄宿・南楼・北楼』写本仮綴 1 冊（1858 年）

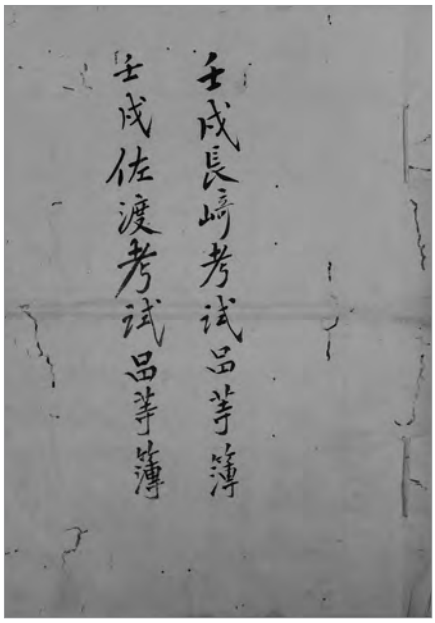
安政 5 年（1858）の春秋に実施された学問所の定期試験の結果を一覧表にして記したもの。試験担当教官は佐藤立軒（佐藤一斎男）で、試験結果の取り纏めは岡本信太郎・新井孝太郎。寄宿生・南楼学生・北楼学生に分けて、科目別に、9 段評価されている。



39 大学別当（松平春嶽）書簡（芳野少博士宛、明治 2 年 8 月 28 日）

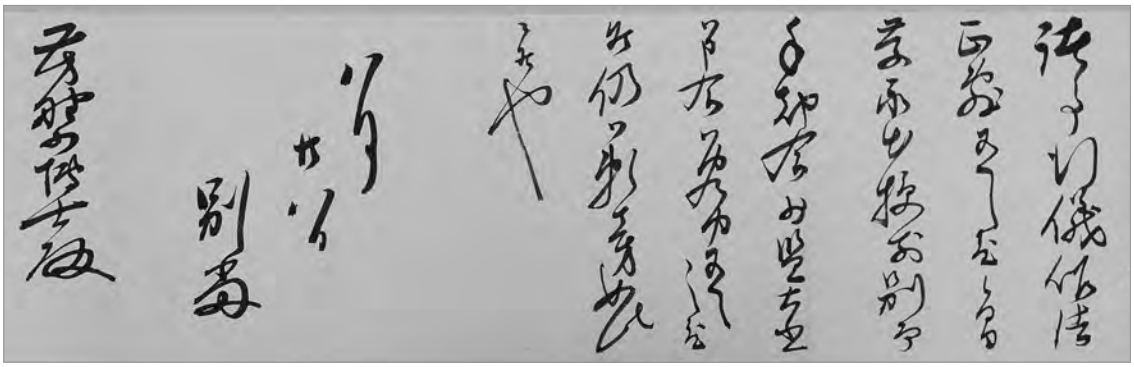
松平春嶽は明治 2 年 8 月 24 日に大学別当を拝した。本日 28 日に初めて大学施設の視察を行うので、そのつもりであらかじめ準備してほしいとの内容。この他に、大学別当から金陵宛ての書簡は、副島種臣が大学掛を拝命することを伝えたものが残る（9 月 13 日付）。



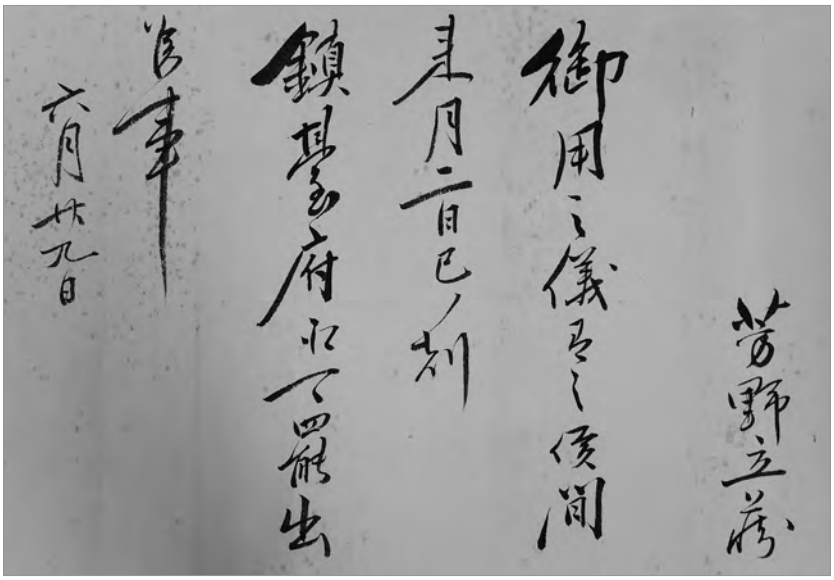


40『壬戌長崎考試品等簿・壬戌佐渡考試品等簿』写本仮綴 1 冊（1862 年）

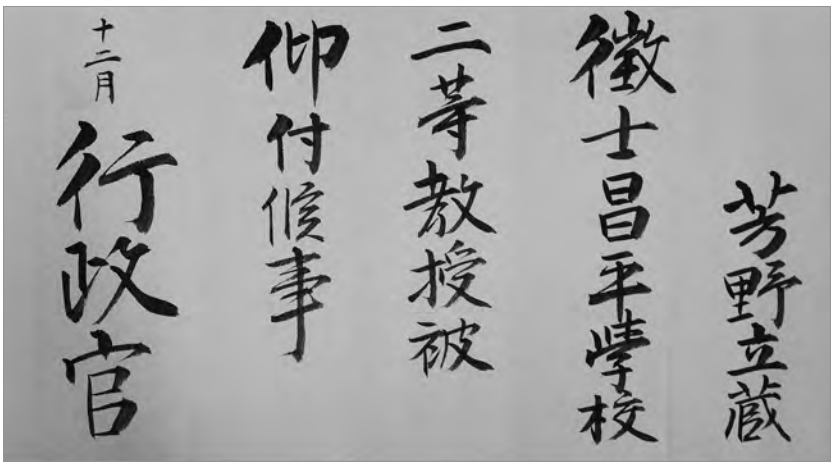
幕末期、幕府は昌平坂学問所や甲府琴徽典館だけでなく、全国の直轄領にも教育機関を開設した。展示品は、文久 2 年（1862）に長崎と佐渡の学問所において実施された考試（試験）の結果を記した記録。答案を江戸に廻達して、昌平坂学問所で評価を行った。9 段階の評価欄が作られているが、低い評価の者が多い。



【釈文】「愈無御障珍重存候。扨て今日巳ノ半剋、学校へ参入ニ付而は、別而不案内、神拝并大成殿も拝見、且又諸寮一同見廻り之筈ニ候間、若質問等承り候而宜候ハヽ其手筈有之度、且又少監始罷越候積ニ候間、諸事行儀作法正敷有之度候間、慶永出校前、別而手都合、少監・大丞御申合、御尽力有之度候。仍御頼旁如此ニ候也。八月廿八日　別当　　芳野少博士殿」

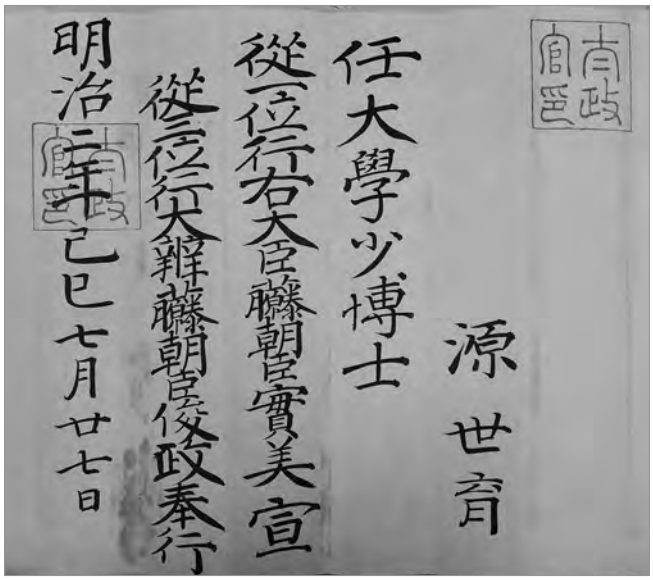


41 鎮台府から金陵への徴命（明治元年 6 月 29 日）

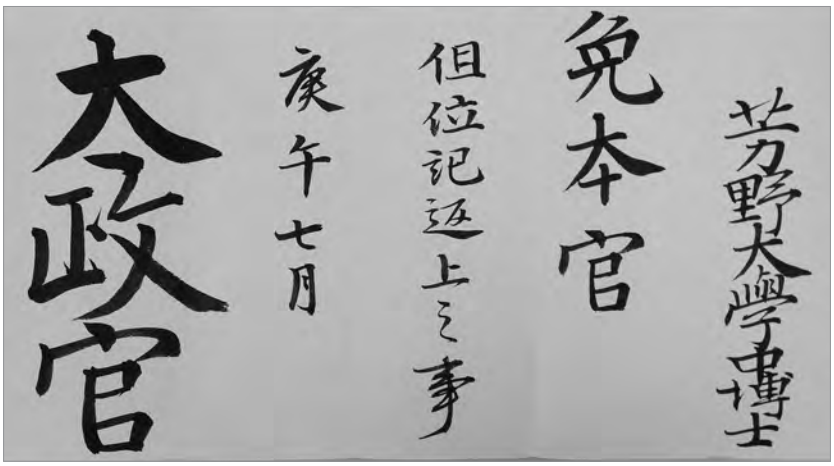


42 行政官から金陵への昌平学校二等教授の徴命（明治元年 12 月）

幕府瓦解をうけて、明治元年 5 月 12 日に金陵は幕府に田中藩への復籍を請うた。しかしこの時は徳川宗家の駿府藩に移動にともなう混乱の最中であり、7 月には田中藩が安房国長尾藩に移動となる。金陵は旧藩復籍の許可がでないまま、幕府機構を接収した鎮台府から徴命を受けたが、この時は病気を理由に辞退した。9 月に漸く旧藩復籍が許可され、その後、12 月に入ってあらためて行政官から長尾藩主本多正訥に対して金陵を昌平学校二等教授として出仕するよう通達があり、これを受けて新政府に出仕することになった。

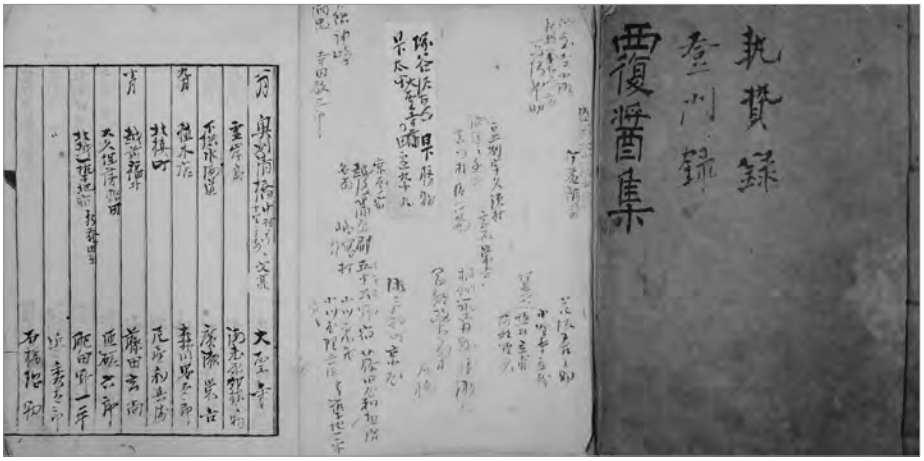


43　大学少博士任官の辞令（明治２年７月 27 日）



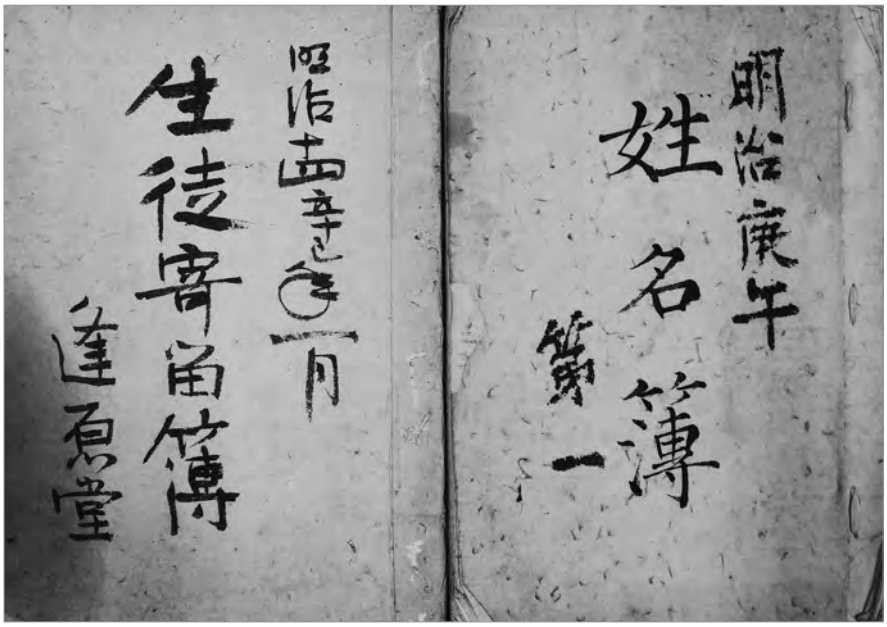
44　大学中博士免官の辞令（明治３年７月）

明治２年２月に自宅を罹災した金陵は、再び旧学問所内の官舎に移り住んだ。その後、官制改革により昌平学校から大学になると、金陵は７月に少博士、10月に中博士・正七位、明治３年３月に従六位に叙されたが、その後の皇漢学と洋学の対立等により学内に紛擾を生じ、大学自体が廃校となって免官となった。その後も御用のため東京滞在を命じられていたが、それも 12 月に免除され、在職中の勉励を賞されて直垂一領を下賜された。現在残る金陵の写真（本書扉）は、この直垂を着した姿である。



45 江戸期の逢原堂入門帳『執贄録』『登門録』（金陵自筆）

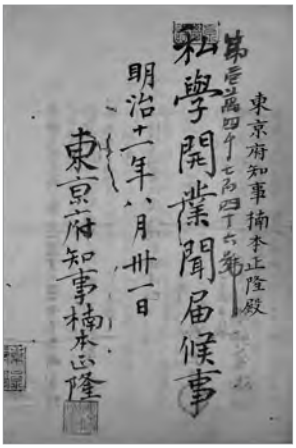
右：1846年以前の入門者約320人、1846～56年の入門者約300人を記録。
左：1856～67年の入門者約350人、1868～72年の入門者約420人を記録。

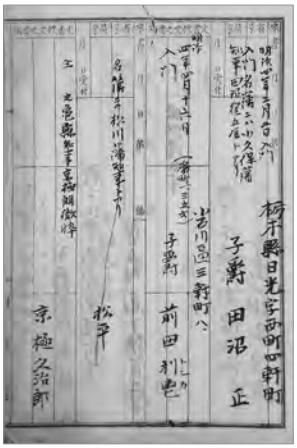


46『生徒寄留簿』（1881 ～寄宿舎名簿）『姓名簿』（1869 ～ 71 門人帳）

47『（試業姓名簿）訳文・講義』『試業姓名簿 講義・素読』（明治 9・10 年）

家塾逢原堂における月例の定期試験の記録。漢文の素読・講義・訳文といった内容は、江戸期の学問所等での課業と同趣のもの。明治期に入っても引き続き漢学の需要が高かったことが分かる。



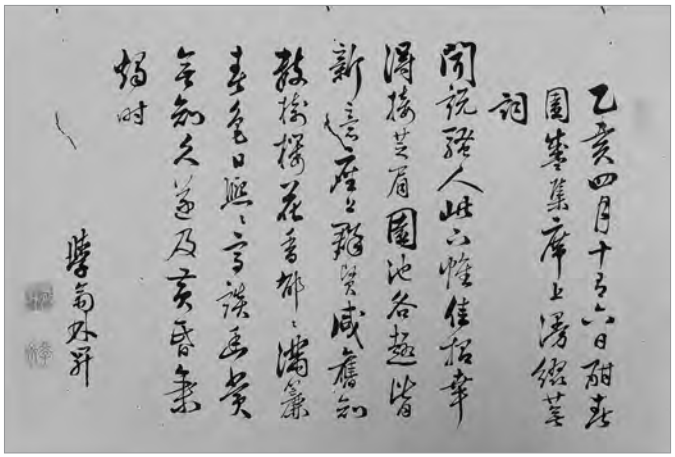


49 芳野世経『私学逢原学校開業願』　48『金陵芳野先生門生名簿』

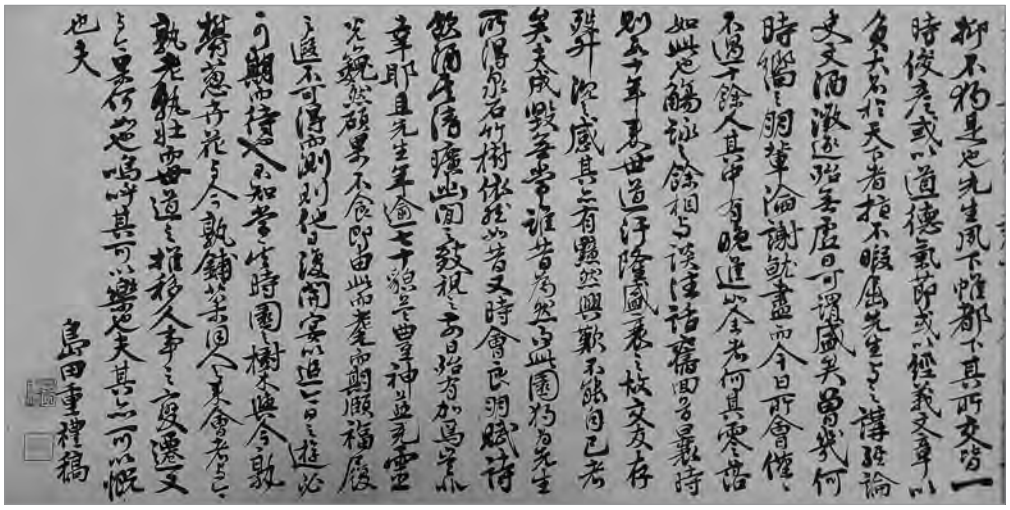
金陵歿後の明治 11 年 8 月 26 日に世経は私学開業願いを提出、同 8 月 31 日に許可された。展示品 49 は私学「逢原学校」開校願書、許可者は東京府知事楠本正隆。門人のなかには、華族も多く著名人も散見される。展示品 48 は、門人帳から著名人・有力者等を抜粋したもの。菊池大麓・田中館愛橘といった自然科学分野で活躍する人物も見いだせる。

50『占春園詩文卷』（芳野赳夫氏所蔵）

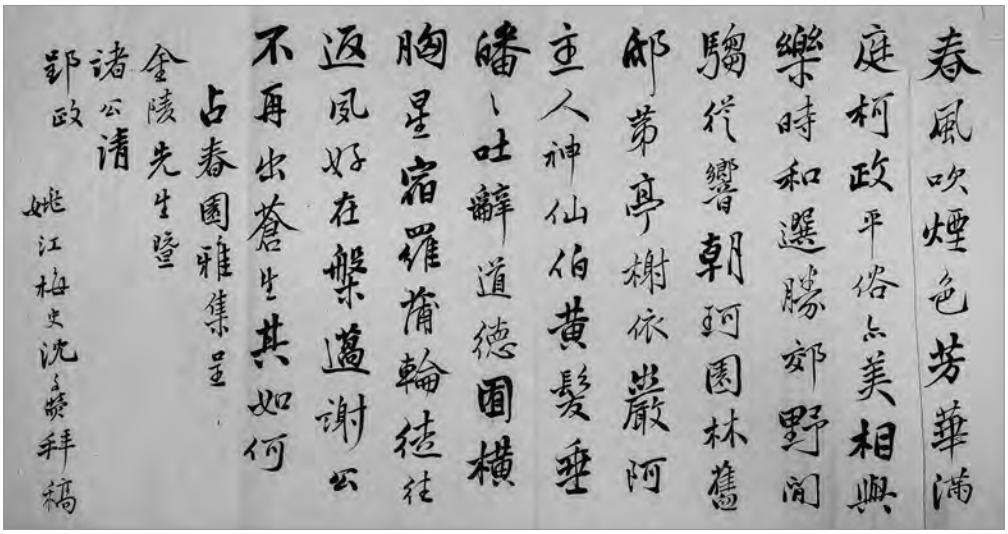
明治６年、金陵は「時事一変シ士已ニ常職ヲ解ケリ、是帰耕ノ時ナリ」と考え、大塚（小石川窪町）の旧守山藩邸（水戸支藩）33,000 坪餘を 1600 両で購入、翌７年８月神田末広町を引き払い市中の喧騒を離れて大塚に転居。人夫を雇って開墾に従事し、文字通り晴耕雨読の餘生を送った。明治８年４月 16 日に金陵は新居に観桜の宴を開いた。同輩の多くは既に世を去り、集まった者は後輩が多かった。展示品はその際に製作された詩文を装丁したもので、題画は橋本雪蕉筆。



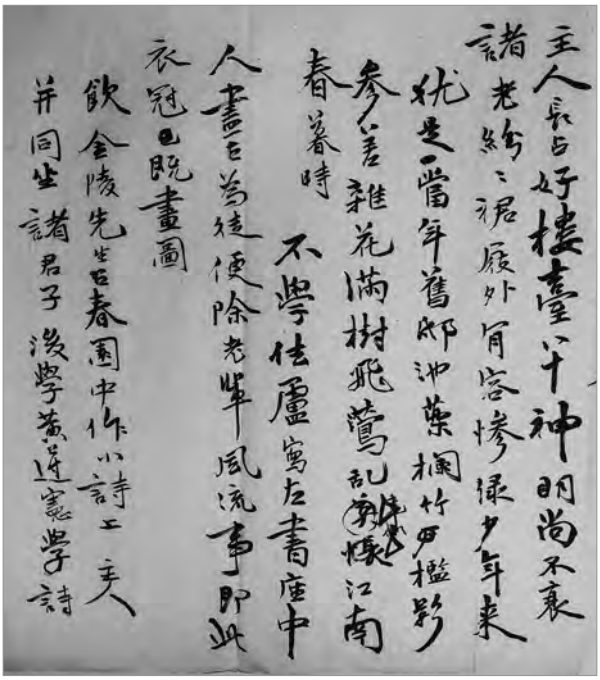
題画に続いて、巻頭は最後の大学頭であった林学斎の七言律詩。



詩文を寄せている人々は、林学斎・岡松甕谷・望月毅軒・青山延寿・藤野海南・島田篁村・猪野中行・信夫恕軒・木原老谷で、学問所関係者が目につく。岡松は幕末の「文会」同人であり、また大学の教官。望月・島田は学問所最末期の儒官であり、その後、信夫・島田は東京大学教官になる。青山は旧水戸藩の史学者。藤野は学問所書生寮で舎長を勤めた。木原は「文会」同人であった藤森弘庵の門人。猪野は学問所付き役人。上掲の雄渾な筆跡は、明治漢学界の泰斗と言われる島田篁村。


春風吹煙色芳華滿
庭柯政平俗亦美相與
樂時和選勝郊野間
騶從響朝珂園林舊
邸第亭榭依巖阿
主人神仙伯黃髮垂
皤吐辭道德囿橫
胸星宿羅蒼輪徒往
返風好在槃邁謝公
不再出蒼生其如何
占春園雅集呈
金陵先生暨
諸公清
鄙政
姚江梅史沈文熒拜稿

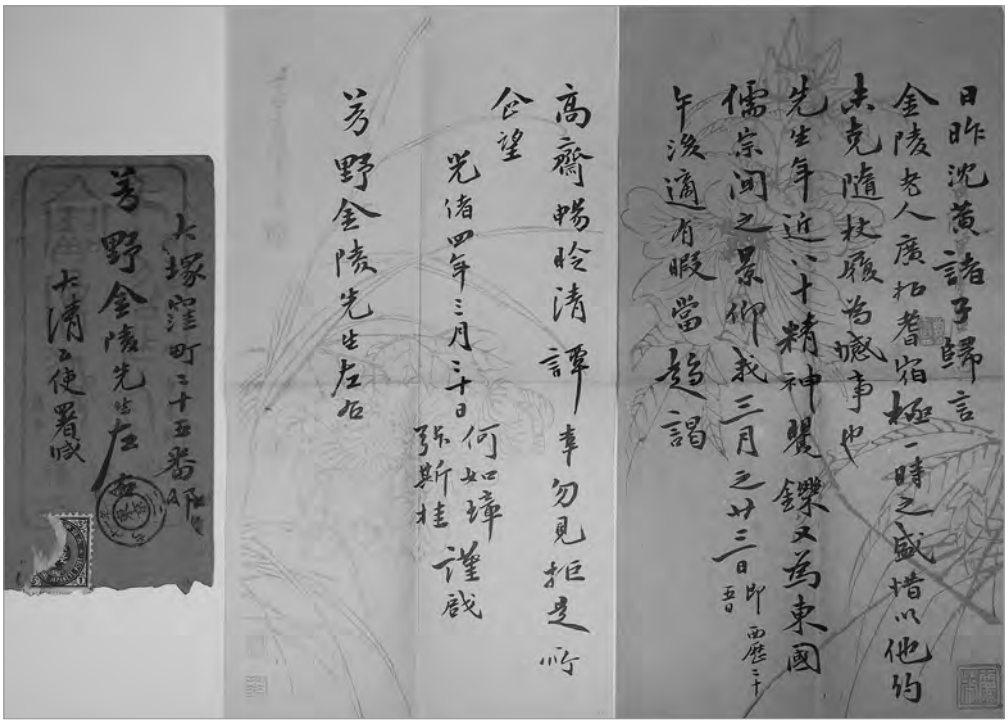
51-1 公使館員沈文熒の詩


主人長占好樓臺十神明尚不衰
諸老約之裙屐外肯容慘淡少年來
況是當年舊邸沖葉欄竹戶檻影
參差雜花滿樹飛鶯亂囀柳
春暮時不學佳麗寓左書座中
人畫已為往便除老輩風流事即此
衣冠已既畫圖
飲金陵先生占春園中作小詩二首
并同坐諸君子淺學黃遵憲學詩

51-2 公使館員黄遵憲の詩

明治11年4月20日、最晩年を迎えたの金陵を（同年8月5日歿77歳）、前年に開設された清国公使館の館員沈文熒・廖錫恩・黄遵憲が訪問し、青山延寿・大嶋信・川田甕江・木原元礼・小永井小舟・信夫恕軒・塩谷時敏らとともに筆談を試みた。

51-3　公使館員たちの名刺



51-4　何如璋・張斯桂書簡

沈・廖・黄の訪問後、当日訪問できなかった公使何如璋と副使張斯桂から金陵に宛てて、近日訪問したい旨を伝えた書簡。

53　金陵撰「芳野世福名字」

52　芳野世経写真

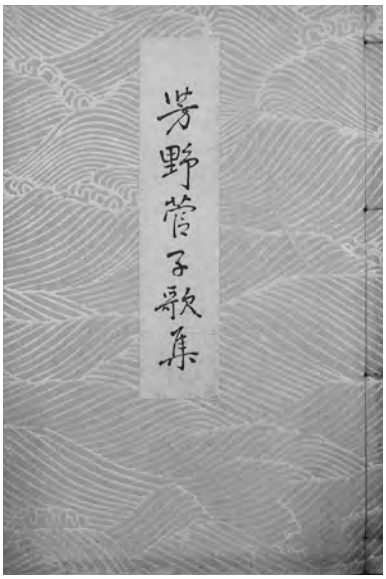
世経（つぐつね）（嘉永 2 年〈1849〉11 月 27 日～昭和 2 年〈1927〉6 月 20 日）

世経は、金陵の四男に生まれ、幼名は福七郎、名は世福、のち世経に改める。字は載叔。展示品 53 にあるように、名・字は金陵が 1860 年に『荘子』に因んで撰んだ。

兄桜陰の出奔により、世福は慶応元年 12 月 18 日に幕府儒者芳野家の惣領となる。維新後、金陵が長尾藩籍に戻ったため、明治 4 年に金陵隠居ののち世経は長尾藩士の家督を継承（1871）。廃藩置県後、世禄を返還し（1874）、東京府士族となる（1875）。父の業を継いで自邸で茶・桑の栽培生産に従事。

1878 年、父の歿後、私立学校「逢原学校」を開校して育英に従事するかたわら、東京府会議員（1878 ～ 90、92 ～ 00、94 ～ 00 議長）、衆議院議員（1890 ～ 91、副議長）、東京市会議員、小石川区会議員などを歴任。教育・土木・衛生・勧業に尽力した。1894 年藍綬褒章受章。また 1901 年の高等師範学校改築に当たり、大塚の自宅敷地 35,000 坪のうち 21,000 坪餘を提供した（20,000 坪弱を売却、2,000 坪弱を献納）。

55　芳野菅子写真



54『芳野菅子歌集』

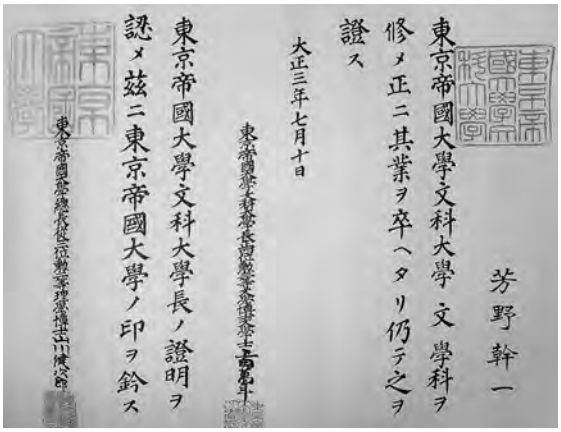
菅子（天保 8 年〈1837〉2 月～大正 4 年〈1915〉2 月 24 日、初名みさ）

金陵の長女菅子は 1852 年（嘉永 5.6.25）から 1871 年（明治 4）まで、約 20 年に亙って常盤橋にあった福井藩江戸上屋敷で奥勤めをした。奥勤めの間に、くま、もせ、そて、八十瀬と名を賜り、奥老女に昇進。橘曙覧・間宮八十に学び和歌に堪能で、『芳野菅子歌集』がある。晩年の菅子は、福井藩上屋敷の奥での年中行事や典礼儀式を回顧して『常盤廼古言』を残している。

文久 3 年に菅子は春嶽の正室勇姫に従って福井に移ったのち、春嶽の隠居謹慎時に養子に迎えられた藩主茂昭との間に、松平家を継承する康荘（1867 ～ 1930、信次郎）を生んでいる。明治 4 年に福井藩を離れたのち飯野吉兵衛に嫁して一女を儲けたが、のち家に戻り、父と弟世経が営む漢学塾逢原堂（逢原学校）の分校として裁縫学校を本石町に開設し（1876 年）、女子教育に当たった。

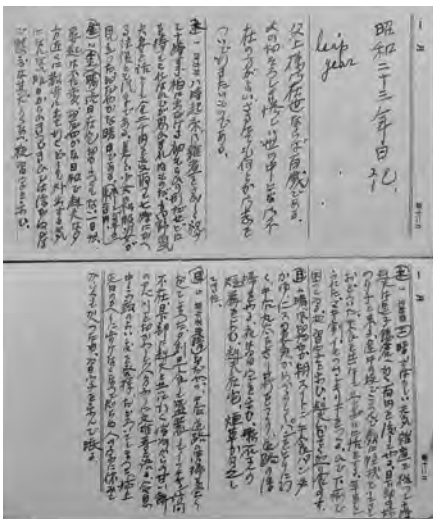
春嶽や松平家と芳野家の関係は長く続き、春嶽は嫡孫の信次郎を金陵に学ばせている。

57　聴講ノート・
星野恒「支那哲学史」


芳野幹一
東京帝國大學文科大學 文學科ヲ
修メ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍テ之ヲ
證ス
大正三年七月十日
東京帝國大學文科大學長ノ證明ヲ
認メ茲ニ東京帝國大學ノ印ヲ鈐ス

56　東京帝大卒業証書（1914 年）

59　学習院高等科教授時代の写真



58　手帳に記された日記

世経の嗣子幹一（1885 ～ 1970）

幹一は、東京の京北中学校から第四高等学校を経て、東京帝大文科大学文学科（支那文学専修）を大正 3 年に卒業、在学中は星野恒・服部宇之吉・塩谷温らの教えを受け、旧制の学習院高等科の教授（1925 ～ 45）として漢文を講じ、「ダルマ」の愛称で親しまれた。共著に『漢語海』等。

附録、芳野金陵・復堂・桜陰印譜

芳野金陵関係年譜

芳野家系図

1～24 金陵　25～32 復堂　33・34 桜陰　35～42 世経　43～55 引首印その他

1 源育之章

2との両面印

2 叔果氏

1との両面印

3 逢原堂記

4 逢原堂記

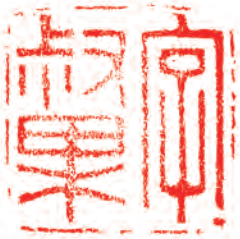
5 芳野世育　叔果氏

連印

6 芳野世育

7との両面印

7 字叔果



6との両面印

8 逢原堂記

9との両面印

12 芳野育

13との両面印

16 山高水長

17との両面印

9 古山□

8との両面印

13 叔果

12との両面印

17 芳野世育

16との両面印

10 源世育章

14 芳野世育

15との両面印・紫檀

18 素逝

19との両面印

11 叔果

竹根　連鎖鈕

15 叔果

14との両面印・紫檀

19 芳野世育　天鬻老人

連印・18との両面印

20 天鬻老人

黒檀・清湖道人刀

21 至楽在襟懐山水非□娯

22との両面印・静湖刀

22 芳野印　金陵

連印・21との両面印・静湖刀

23 古香・24 源育　金陵

両面印

25 芳野毅印

26との両面印

26 伯任氏

25との両面印

27 芳野長毅伯任

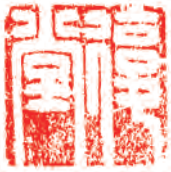
28との両面印

28 眼中□凡回

27との両面印

29 伯任氏

30 復堂



31 復堂

32との両面印

32 歳不我與

31との両面印

33 芳野世秀

木印

34 劼堂

35 芳野世経

36との両面印

36 士権

35との両面印

37 芳野世福

38との両面印

38 載叔

37との両面印

39 邁亭

40 源経之印邁堂

連印

41 文不在斯乎

42との両面印

42 山高水長　芳野福印

連印・41との両面印

43 古道照顔色

44 忠孝吾家之宝経史吾家之田

堅木・竹形鈕

45 狂奴故態

翠峰刀

46 坐茂樹以終日濯清泉以自潔

獅子鈕　奚疑

47 破天荒・48 雄飛

両面印

49 墨田老農

立遼任篆（立原杏所）

50 南朝遺民

51 我□我書屋

52 古道照顔色

53 松華如雨處

54 遅々澗畔松

55 適所適

56 守眞

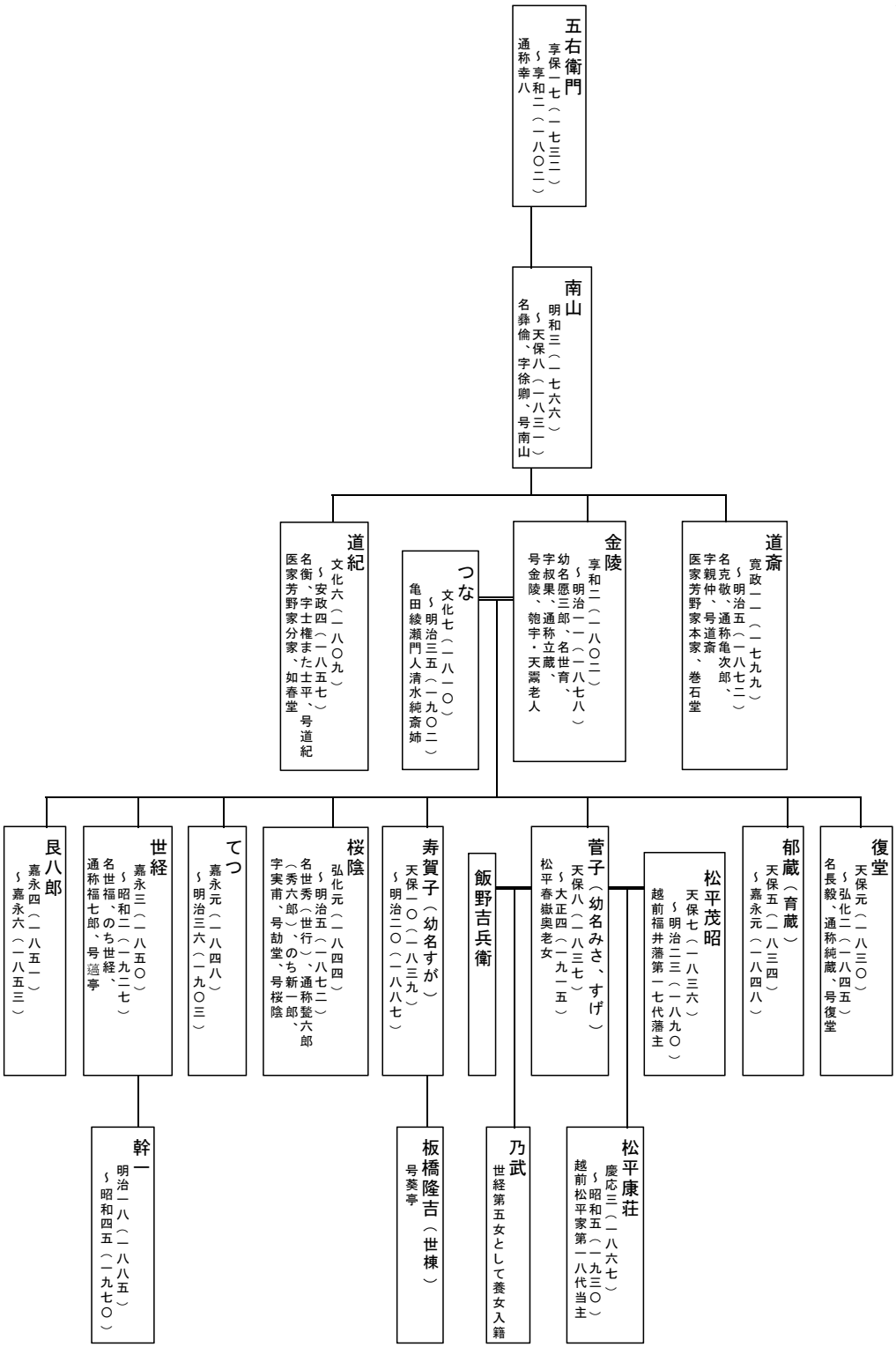
芳野金陵関係年譜

年号	西暦	芳野家	備考
天正四頃	一五七六	▼芳野家、松ヶ崎に定住か。	
享保一七	一七三二	▼金陵祖父五右衛門生。	
明和三	一七六六	▼金陵父南山（名彝倫、字叙卿、号南山）生。	
安永七	一七七八		▼七月　亀田綾瀬生。
寛政三	一七九一		▼五月　熊沢惟興生。
寛政一一	一七九九	▼金陵兄道斎（名克敬、通称亀次郎、字親仲、号道斎、医家芳野家本家）生。	▼一月　安井息軒生。
享和二	一八〇二	▼金陵祖父五右衛門没（享年七二）。 ▼一二月二〇日（一八〇三・一・一三）　金陵生。	
文化六	一八〇九	▼金陵（七）、弟道紀（名衡、字士権また士平、号道紀。医家芳野家分家）生。	▼四月　塩谷宕陰生。
文化一二	一八一五	▼南山（五〇）、金陵（一四）を伴い、江戸・神田豊島町にて儒・医を開業。	
文化一三	一八一六		▼八月　吉田松陰生。
文政六	一八二三	▼金陵（二二）、江戸に遊学し、亀田鵬斎（七二）の門を叩くも、鵬斎高齢のため、その子綾瀬（四六）に入門。	
文政九	一八二六	▼金陵（二五）、浅草福井町にて開塾。	▼三月　亀田鵬斎没（享年七五）。
文政一一	一八二八	▼金陵（二七）、日本橋数寄屋町に移居。清水純斎（綾瀬門人）女つな（一九）を娶る。	
文政一二	一八二九	▼金陵（二八）、罹災し、檜物町に移居。	▼三月　楫取素彦生。
天保元	一八三〇	▼四月　金陵（二九）、長男長毅（通称純蔵、字伯任、号復堂）生。	
天保二	一八三一	▼八月一一日　金陵（三〇）、父南山没（享年六五）。	
天保五	一八三四	▼金陵（三三）、罹災し、茅場町に移居。 ▼八月　金陵二男郁蔵（育蔵）生。	
天保八	一八三七	▼二月　金陵（三六）、長女菅子（幼名みさ、すげ）生。	▼松田和孝生。

天保一〇	一八三九	▼金陵（三八）、二女寿賀子（幼名すが）生。	
天保一一	一八四〇		▼▼五月　久坂玄瑞生。 ▼河本正安生。
天保一五	一八四四	▼一〇月　金陵（四三）、三男桜陰（名世秀・世行、通称甃六郎・秀六郎、のち新一郎、字実甫、号劼堂・桜陰）生。	
弘化二	一八四五	▼二月二九日　金陵（四四）、長男復堂没（享年一六）。 ▼金陵、罹災し、新居を築く。	
弘化四	一八四七	▼八月　金陵（四六）、本多家第七代田中藩第五代藩主正意の儒官となり、正意の七男正訥の教育に当たる。	
嘉永元	一八四八	▼四月二日　金陵（四七）、三女てつ生。 ▼八月一八日　金陵、二男郁蔵没（享年一五）。	
嘉永二	一八四九	▼一一月二七日　金陵（四八）、四男世経（名世経、のち世福、通称福七郎、号邁亭）生。	
嘉永三	一八五〇	▼九月　金陵（四九）、本多侯が封地に就くに従い、監察に当たる。帰路、湯治のため伊豆修善寺を訪れ、『東帰念日記』を著す。	
嘉永四	一八五一	▼金陵（五〇）、五男艮八郎生。	
嘉永六	一八五三	▼六月三〇日　金陵（五二）、五男艮八郎没（享年三）。	▼六月　ペリー来航。
嘉永七	一八五四		▼▼一月　ペリー再来航。 ▼七月　熊沢惟興没。
安政四	一八五七	▼金陵（五六）、弟道紀没（享年四九）。	▼吉田松陰、松下村塾を継ぐ。
安政六	一八五九		▼▼六月　松田和孝自害。 ▼十月　吉田松陰、安政の大獄により刑死。
万延元	一八六〇	▼▼桜陰（一八）、田中藩藩校日知館助教。 ▼十一月　金陵（五九）、物頭に進む。	
文久二	一八六二	▼十二月十二日（一八六三・一・三一）　金陵（六一）、安井息軒、塩谷宕陰とともに昌平坂学問所付の幕府御儒者に登庸される（文久三博士）。	▼▼八月　生麦事件。 ▼河本正安没。
文久三	一八六三	▼▼二月　金陵（六二）、両番の上席に班す。 ▼桜陰（二一）、昌平坂学問所助教。	
明治元	一八六八	▼十二月、金陵（六七）、昌平坂学問所教授。	

元治元	一八六四	▼七月　桜陰（二二）、天狗党の乱に参加するため水戸へ向かう。 ▼九月　桜陰、鹿島の大船津で幕府軍に敗れ、捕えられ投獄。	▼七月　久坂玄瑞自害。
慶応三	一八六七		▼八月　塩谷宕陰没。
明治元	一八六八	▼十二月、金陵（六七）、昌平学校二等教授。	
明治二	一八六九	▼二月　金陵（六八）、罹災し、旧昌平坂学問所官舎に移居。 ▼十月　金陵、大学中博士任官。	
明治三	一八七〇	▼七月　金陵（六九）、大学中博士免官。	
明治五	一八七二	▼金陵（七一）、兄道斎没（享年七四）。 ▼九月一〇日　金陵三男桜陰没（享年二九）。	
明治六	一八七三	▼金陵（七二）、大塚窪町旧守山藩邸約三万坪を購入し、開墾に従事。	
明治七	一八七四	▼金陵（七三）、大塚窪町に移居し、生徒に教える傍ら、著述に従事。	
明治九	一八七六		▼九月　安井息軒没。
明治一一	一八七八	▼八月五日　金陵没（享年七七）。	
明治一八	一八八五	▼金陵四男世経長男幹一生。	
明治二〇	一八八七	▼二月二四日　金陵二女寿賀子没（享年四九）。	
明治三七	一九〇四	▼八月一八日　金陵三女てつ没（享年五六）。	
大正元	一九一二		▼八月　楫取素彦没。
大正四	一九一五	▼金陵長女菅子没（享年七九）。	
昭和二	一九二七	▼六月二〇日　金陵四男世経没（享年七九）。	
昭和四五	一九七〇	▼金陵四男世経長男幹一没。	

芳野家系図


五右衛門
享保一七（一七三二）
～享和二（一八〇二）
通称幸八
南山
明和三（一七六六）
～天保八（一八三一）
名彝倫、字徐卿、号南山
道斎
寛政一一（一七九九）
～明治五（一八七二）
名克敬、通称亀次郎、
字親仲、号道斎
医家芳野家本家、巻石堂
金陵
享和二（一八〇二）
～明治一一（一八七八）
幼名愿三郎、名世育、
字叔果、通称立蔵、
号金陵、匏宇・天鬻老人
つな
文化七（一八一〇）
～明治三五（一九〇二）
亀田綾瀬門人清水純斎姉
道紀
文化六（一八〇九）
～安政四（一八五七）
名衡、字士権また士平、号道紀
医家芳野家分家、如春堂
復堂
天保元（一八三〇）
～弘化二（一八四五）
名長毅、通称純蔵、号復堂
郁蔵（育蔵）
天保五（一八三四）
～嘉永元（一八四八）
松平茂昭
天保七（一八三六）
～明治二三（一八九〇）
越前福井藩第一七代藩主
菅子（幼名みさ、すげ）
天保八（一八三七）
～大正四（一九一五）
松平春嶽奥老女
飯野吉兵衛
寿賀子（幼名すが）
天保一〇（一八三九）
～明治二〇（一八八七）
桜陰
弘化元（一八四四）
～明治五（一八七二）
名世秀（世行）、通称甃六郎
（秀六郎）、のち新一郎、
字実甫、号勘堂、号桜陰
てつ
嘉永元（一八四八）
～明治三六（一九〇三）
世経
嘉永三（一八五〇）
～昭和二（一九二七）
名世福、のち世経、
通称福七郎、号適亭
艮八郎
嘉永四（一八五一）
～嘉永六（一八五三）
松平康荘
慶応三（一八六七）
～昭和五（一九三〇）
越前松平家第一八代当主
乃武
世経第五女として養女入籍
板橋隆吉（世棟）
号葵亭
幹一
明治一八（一八八五）
～昭和四五（一九七〇）

芳野金陵と幕末日本の儒学

発行日　平成二七年一〇月一日
編集者　大学資料展示室運営委員会
発行者　二松學舎大学附属図書館
〒一〇二―八三三六
東京都千代田区三番町六―一六
印刷製本　株式会社サンセイ
（非売品）２０１５©

二松學舍大学　〒102-8336 東京都千代田区三番町６-16